

広島市安佐北区上深川町所在

上深川北遺跡 発掘調査報告

1991・3

は し が き

広島市旧市街地の北側に隣接する旧高陽町は、市街地の広域化に伴い、宅地造成等の開発が盛んに行われています。この度発掘調査を実施した上深川北遺跡の所在する狩小川地区においても、山陽自動車道広島東インターチェンジの設置や、県道広島三次線の整備等による都市圏の広域化に伴って、開発の波が押し寄せています。

その状況の下、上深川北遺跡も工場建設工事に伴って消滅することになり、事前に発掘調査を実施したものです。

調査の結果、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壇墓等が発見され、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけて営まれた集落跡であることを明らかにすることができ、われわれの祖先の人々の生活を解明していく上で大切な資料のひとつとなりました。

本遺跡は工場の建設とともに消滅してしまいましたが、記録として残しました本報告書が地域の歴史学習の一助となり、郷土に対する理解と愛着を深めていただくことに役立てば幸いです。

最後に、この調査にあたり、ご指導、ご協力をいただいた諸先生方や、寒い中発掘作業に従事して下さった方々等関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成 3 年 3 月

財団法人広島市歴史科学教育事業団

理 事 長 鍋 岡 聖 剛

例 言

1. 本書は、平成元（１９８９）年度と平成２（１９９０）年度に実施した、株式会社研創による工場建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、本事業の施工者である株式会社研創代表取締役林満大より委託を受けて、平成元年度は広島市教育委員会（以下「教育委員会」とする）が、平成２年度は財団法人広島市歴史科学教育事業団（以下「事業団」とする）が実施した。
3. 遺構・遺物の実測・写真撮影は、幸田淳・江崎一博・高下洋一が実施した。また、遺物の実測・製図は幸田・高下が行い、一部製図に関して岡野孝子が補助した。なお、本書の執筆・編集は幸田の指導の下で高下が行った。
4. 図版１ｂの空中写真は、スタジオ・ユニ（井手三千男氏）に委託した。
5. 本書で用いた略記号は次のとおりである。
SH；竪穴住居跡 SB；掘立柱建物跡 SK；土坑 SX；土墳墓
6. 本書に用いた北方位は第１・２図を除き、すべて磁北である。
7. 第１図の「周辺主要遺跡分布図」は、建設省国土地理院発行の５０，０００分の１の地形図（海田市）を使用した。
8. 発掘調査によって得られた遺物及び図面・写真等は教育委員会から委託を受けて事業団において保管・活用している。

目 次

I	はじめに	1
II	位置と環境	2
III	遺構と遺物	6
IV	まとめ	27

図 版 目 次

図版 1 a.	上深川北遺跡遠景（西から）	5 b.	第 6 号住居跡完掘状況（東から）
1 b.	遺跡全景（第 1 年次調査後；東から）	図版 6 a.	第 1 号堀立柱建物跡完掘状況（東から）
図版 2 a.	第 1 号住居跡土器出土状況（南から）	6 b.	第 2 号堀立て柱建物跡完掘状況（東から）
2 b.	第 2 号住居跡完掘状況（南西から）	6 c.	土墳墓完掘状況（南東から）
図版 3 a.	第 3 号住居跡床検出状況（北東から）	図版 7	出土遺物（I）
3 b.	第 3 号住居跡完掘状況（北西から）	図版 8	出土遺物（II）
図版 4 a.	第 4 号住居跡完掘状況（南東から）	図版 9	出土遺物（III）
4 b.	第 5 号住居跡完掘状況（南西から）		
図版 5 a.	丘陵西斜面下平坦部遺構完掘状況（南から）		

挿 図 目 次

第 1 図	周辺主要遺跡分布図	3	第 1 3 図	第 4 号住居跡出土鉄器・石器実測図	17
第 2 図	上深川北遺跡遺構配置図	5	第 1 4 図	第 5 号住居跡実測図	18
第 3 図	第 1 号住居跡実測図	7	第 1 5 図	第 5 号住居跡出土土器実測図	19
第 4 図	第 1 号住居跡出土土器実測図	7	第 1 6 図	第 5 号住居跡出土鉄器実測図	19
第 5 図	第 2 号住居跡実測図	9	第 1 7 図	第 6 号住居跡実測図	20
第 6 図	第 2 号住居跡出土土器実測図	11	第 1 8 図	第 6 号住居跡出土土器実測図	21
第 7 図	第 2 号住居跡出土鉄器・石器実測図	12	第 1 9 図	第 6 号住居跡出土鉄器・石器実測図	22
第 8 図	第 3 号住居跡実測図	13	第 2 0 図	第 1 号堀立柱建物跡実測図	23
第 9 図	第 3 号住居跡出土土器実測図	14	第 2 1 図	第 2 号堀立柱建物跡実測図	24
第 1 0 図	第 3 号住居跡出土鉄器・石器実測図	15	第 2 2 図	土墳墓実測図	25
第 1 1 図	第 4 号住居跡実測図	16	第 2 3 図	調査区内出土遺物実測図	26
第 1 2 図	第 4 号住居跡出土土器実測図	17			

はじめに

教育委員会では、昭和63年4月広島市安佐北区上深川地区の造成計画を知るとともに、埋蔵文化財の有無についての照会を受けた。これを受けて教育委員会では試掘調査を行い、造成区域内のうち本遺跡の丘陵尾根上に埋蔵文化財の存在を確認した。引き続き原因者に対して遺跡の取り扱いについて協議を行った結果、当初の開発計画は変更となった。

ところが、その後平成元年8月に株式会社研創代表取締役林満大より工場造成工事に伴う埋蔵文化財の有無について問い合わせがあった。すでに埋蔵文化財の確認をしている教育委員会では、遺跡の取り扱いについて協議を重ねたが、本遺跡が計画区域の進入路部分に該当し、計画の変更は無理ということになり、事前に発掘調査を実施して記録保存を図ることとなった。これを受けて教育委員会が平成元年10月から12月まで、また事業団が平成2年10月から11月まで2年次にわたって調査を実施した。

調査実施にかかる関係者は下記のとおりである。

調査委託者 株式会社研創代表取締役 林満大

調査主体 一年次 広島市教育委員会

二年次 財団法人広島市歴史科学教育事業団

調査関係者 一年次 上川孝明 社会教育部長

繁野勝元 管理部長

桧垣栄次 管理課文化財係長

二年次 片岡寿一 常務理事

若野健二 文化財課長

若島一則 文化財課事業係主査

岡野孝子 文化財課嘱託

調査者 一年次 幸田 淳 管理課文化財係主査（現事業団文化財課事業係長）

江崎一博 管理課文化財係主事

大崎尚吾 管理課文化財係主事（現事業団文化財課主事）

二年次 幸田 淳 文化財課事業係長

高下洋一 文化財課学芸員

調査補助員・整理作業員（順不同、敬称略）

戸井貴志夫、戸井逸子、太田松野、坪木征子、山田逸二、山田和子、榎崎節郎、
榎崎典子、宗近幸子、佐久間恵、佐久間寿美子、岡原節子、岩田貴代子、平岩
カスミ、平岩絹枝、高瀬サダ子、谷本敬子、名尾君子、原島和美、空ちづる、
川手京子、石田孝子、植木真澄、久都内一男、石原正行、石原光枝、石原雪美、
沖村憲六、木原美喜江、河合淳子、住川香代子、佐伯ひとみ、小林和子

なお、株式会社研創、高田土木設計株式会社、山陽工業株式会社、スタジオ・ユニ井手三千男氏、高陽公民館職員、広島市文化財保護指導委員福川朝幸氏、地元在住の平岩正治氏のほか多くの方々には、調査を円滑に進めるため、多大なご配慮をいただいた。また報告書作成にあたっては、広島大学文学部考古学研究室、（財）広島県埋蔵文化財調査センターから広範なご教示をいただいた。ここに記して謝意を表したい。

II 位置と環境

上深川北遺跡は、広島市安佐北区上深川町字椎村及び字森之木に所在する。

本遺跡の所在する上深川町を含む旧高陽町は、広島市街地の北東に隣接し、百万都市広島市のベッドタウンとして団地造成やそれに伴う道路建設等の開発が進んでいる。その多くは太田川左岸地域の二ヶ城山（標高約482m）から西及び北西にかけて派生するなだらかな低丘陵地帯を造成したもので、旧来の地形はほとんど失われている。上深川北遺跡は、椎村山（標高282m）から西方向に派生した標高60～70mの低丘陵尾根上にあり、現水田面との比高差は約30mである。丘陵眼下には、白木町の中心から蛇行しながらやや狭い沖積地を形成しつつ西南方向に三篠川が流れている。この三篠川は、本遺跡の北西約500mのところで直角に折れ、ここで安芸区福田方面から狭い沖積地を形成しつつ北流する小河原川と合流する。この合流する地点は、やや広い沖積地を形成している。

ところで、旧高陽町の北東部に位置している上深川町は、三篠川及び小河原川が形成する沖積地が狭く、また三方を囲む鬼ヶ城山（標高737m）、木ノ宗山（標高414m）、椎村山（標高282m）の山裾が急に立ち上がっており、低丘陵はわずかにみられるのみであるため、従来あまり遺跡の存在が知られていない地域である。本遺跡の周辺の主要な弥生時代の遺跡をあげれば、本遺跡の約300m北に同じく椎村山から西側に派生する丘陵先端部上に立地する安芸南部地域の弥生時代後期土器の標式遺跡である上深川遺跡と本遺跡の南西約2kmのところにある木ノ宗山の南西中腹（標高約250m）に位置する安芸区福田木ノ宗山遺跡が知られるのみである。上深川遺跡は昭和31年に広島大学によって調査が行われたが、明確な遺構は検出されていない。丘陵鞍部からピット状の遺構が検出され、その遺物包含層から比較的古くまとまった土器が検出されている。また木ノ宗山遺跡は銅鐸・銅剣・銅戈の埋納遺跡として県史跡に指定されている。

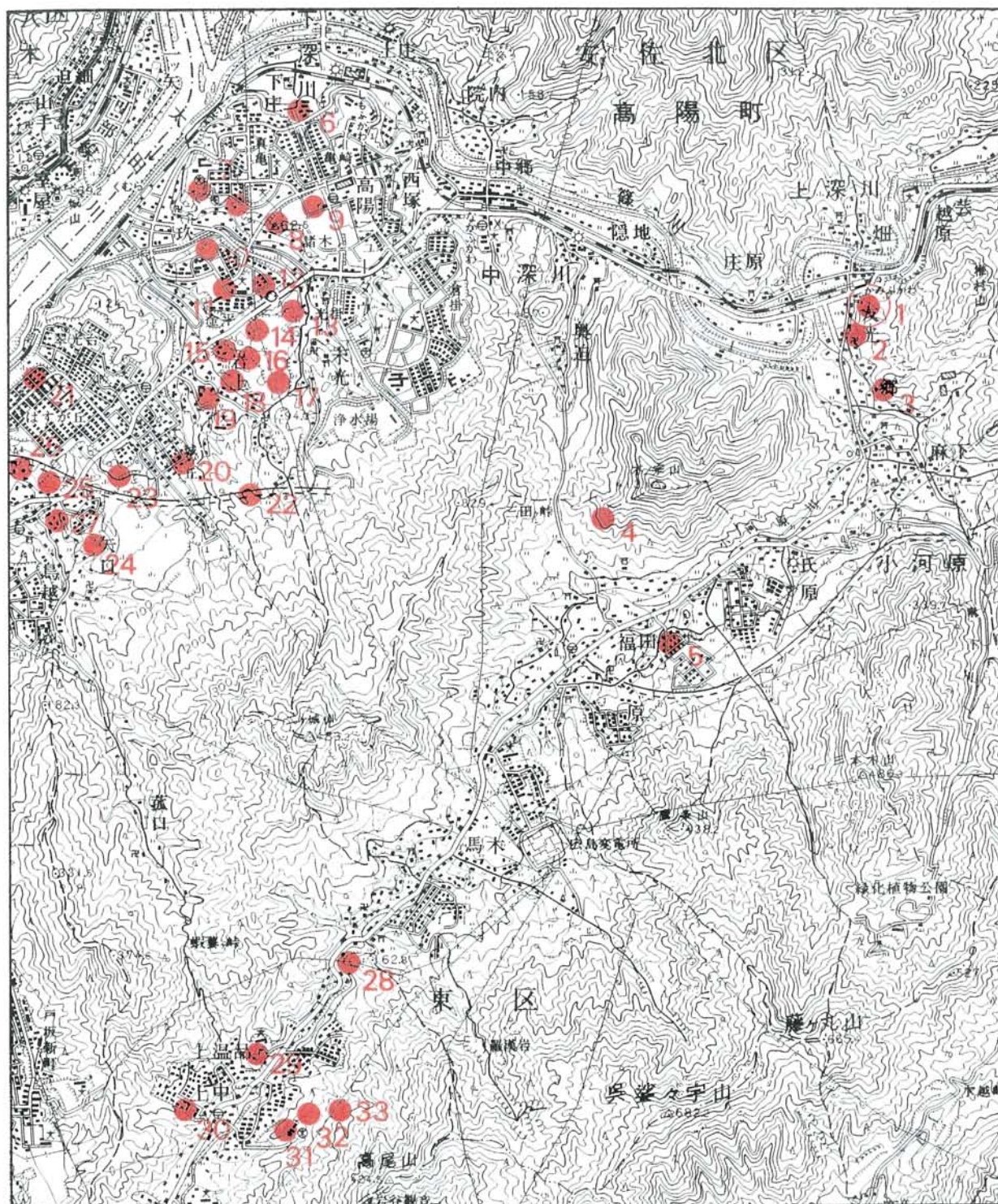
なお三篠川・小河原川流域において、本遺跡が集落遺跡のはじめての調査事例である。ここで大規模な団地造成等にもなっており、集落遺跡が数多く発見されている旧高陽町の太田川左岸地域の様相をまとめておこう。これらの集落遺跡は、すべて太田川の氾濫原を避け、太田川の支流の小河川の流れる谷間に農業生産の基盤をもつと考えられる。そして狭い可耕地を最大限に確保するためか、周囲の水田面等からの比高30～50mの低丘陵上に位置している。ほとんどの遺跡が弥生時代後期から古墳時代前期までの時期に所属し、それ以降は丘陵上から姿を消すと考えられている。集落の規模については、大明地遺跡のように一時期あたり最大10数軒の比較的大きな集落もあるが、そのほとんどは、「三～四戸を一単位とする小さな集団」である。また継続的に営まれた遺跡はほとんどなく、短期間のものが多い。すなわち、「廃絶型集落」・「断続型集落」とよばれる形態を示しており、これらは「三～四戸を一単位とする小さな集団」ごとに、丘陵眼下を流れる小河川流域を単位として、移住・移動を行っていると考えられる。例えば諸木川流域における集落遺跡群の場合、約500m後の間隔を置いて、各々狭小な開拓平地に面して位置し、「水」を媒介として密接な関係にあったものと考えられるが、恵下遺跡群（諸木川下流域の拠点集落と捉えられる。真亀A～G地点遺跡において、弥生時代後期後葉まで集落が営まれる。）から、あたかも後期前葉から後期後葉まで集落が営まれる。）から、あたかも後期後葉から古墳時代初頭の時期と考えられる山手A・B地点遺跡、寺迫遺跡、西山遺跡へと、派生・分村していくかのような動きが捉えられる。

ところで、本町の南西約3kmのところに所在する旧安芸町温品地域においても弥生時代の遺跡が多く見つかり、特に温品川流域において、県史跡畳谷遺跡、畳谷東遺跡が調査されている。両遺跡は同一丘陵尾根上に立地し、畳谷遺跡では住居跡15軒、土坑22基、貝塚3か所等が検出され、畳谷東遺跡では住居跡10軒、土坑3基等が検出され、弥生時代後期中葉を中心とする弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて営まれた集落遺跡であることが判明している。

先述したように、本遺跡は三篠川・小河原川流域の低丘陵上における集落遺跡としては、はじめての事例である。しかしながら、太田川下流域左岸や温品川流域の状況からいえば、本遺跡周辺の低丘陵上にも該期の集落遺跡が遺存している可能性は大きいと思われる。

注

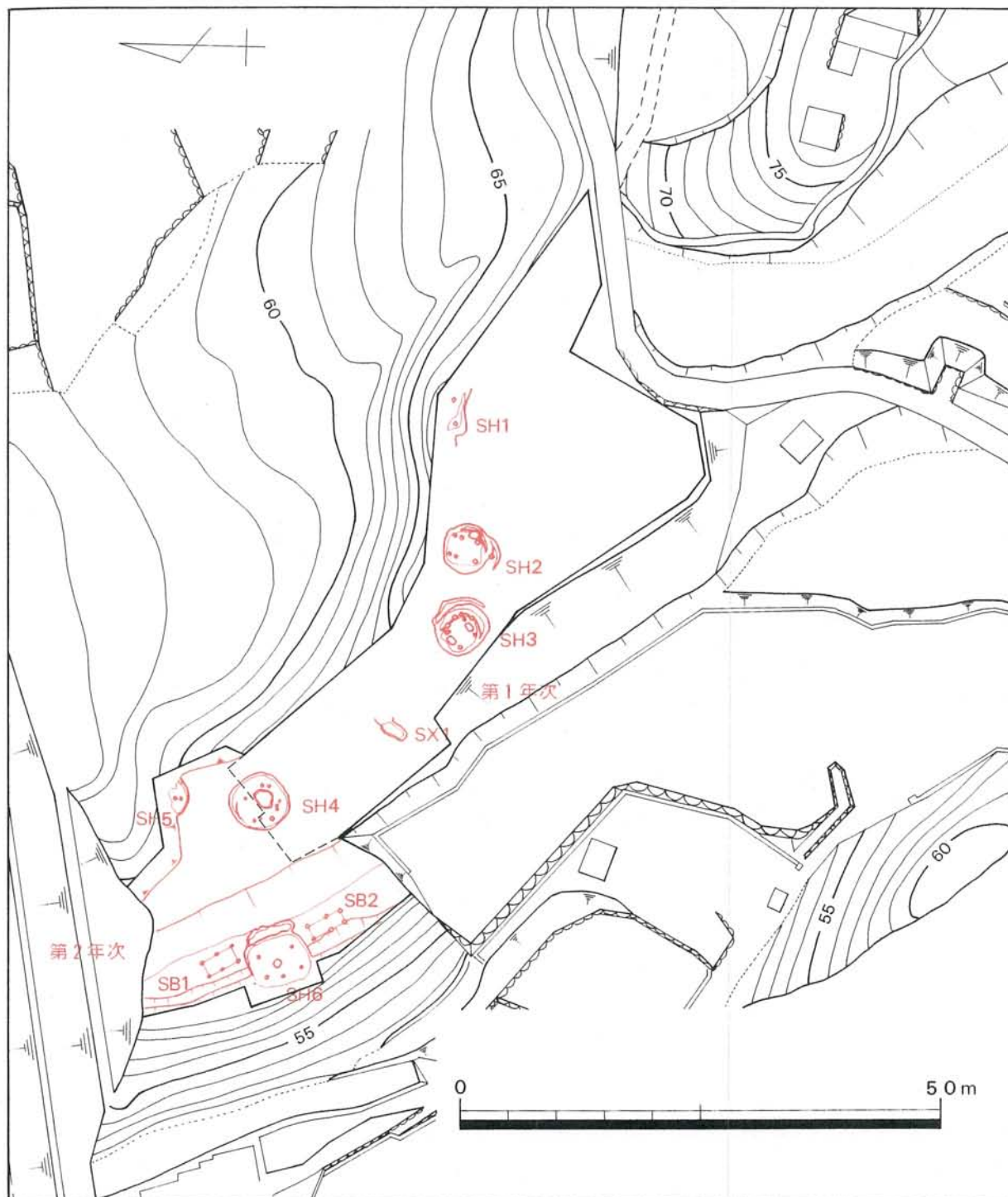
1. 松崎寿和「広島県安佐郡上深川遺跡」『日本考古学協会年報』5、1957年。



1. 上深川北遺跡 2. 上深川遺跡 3. 小河原遺跡 4. 木ノ宗山遺跡 5. 烏帽子岩遺跡 6. 狐ヶ城遺跡 7. 恵下山遺跡群 8. 寺迫遺跡 9. 西山・北山遺跡群 10. 山手遺跡群 11. 金平遺跡群 12. 大井遺跡群 13. 末光C地点遺跡 14. 末光A地点遺跡 15. 岩上山田遺跡 16. 末光D地点遺跡 17. 末光B地点遺跡 18. 末光E地点遺跡 19. 岩上貝塚 20. 城前遺跡 21. 西願寺北遺跡 22. 金川遺跡 23. 高陽台A地点遺跡 24. 高陽台B地点遺跡 25. 大久保遺跡 26. 月ノ背神社遺跡 27. 中矢口遺跡 28. 惣の谷遺跡 29. 安芸小学校貝塚 30. 大原遺跡 31. 畳谷遺跡 32. 畳谷東遺跡 33. 畳谷鉄塔上貝塚

第1図 周辺主要遺跡分布図(海田市, 1:50,000)

2. 森本六爾「安芸福田遺跡調査予報」『人類学雑誌』第44巻第4号, 1929年。
3. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大明地遺跡」『山陽自動車道建設工事に 伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(Ⅳ)(財団法人広島県埋蔵文化財調査センター調査 報告書第55集), 1987年。
4. 河瀬正利「高陽町のあけぼの」『高陽町史』, 1979年
5. 広島県教育委員会「恵下山遺跡群」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発 掘調査報告』, 1977年。
6. 広島県教育委員会「山手遺跡群」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』, 1977年。
7. 広島県教育委員会「寺迫遺跡」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』, 1977年。
8. 広島県教育委員会「西山・北山遺跡群」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化 財発掘調査報告』, 1977年。
9. 広島県教育委員会『広島市安佐北区落合南三丁目所在岩上山田遺跡発掘調査報告』(広島市の文化財第40集), 1988年。
10. 広島県教育委員会「豊谷遺跡」『広島県文化財調査報告』第14集, 1983年。
11. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『須賀谷古墳群・豊谷東遺跡発掘調査報告書』(財団法人広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第41集), 1985年。



第2図 上深川北遺跡遺構配置図(1:750)

III 遺 構 と 遺 物

1. 調査の概要

上深川北遺跡は、椎村山から西へ派生する丘陵尾根上に位置する。この丘陵尾根上は、近年まで畑地として利用され、旧地形はほとんど失われているため遺構への影響も想定された。

発掘調査は、この尾根線を基線としてそれに直交する畦を残して16の調査区を設定し、遺構面までの掘り下げを行った。また第6号住居跡の位置する丘陵尾根西側の一段下った平坦面については、東西方向に試掘トレンチを2本入れ、遺構の確認を行った。

丘陵尾根上では、表土下約30cmのところで遺構を検出したが、この面は耕作によって一部削平を受けていることが認められた。この丘陵尾根上からは、竪穴住居跡5軒、土墳墓1基を検出した。

また、丘陵尾根西側下平坦面では、南に入れたトレンチの表土下約1.5mから、多量の土器片と鉄鏃を検出するとともに、住居跡の堀形を確認した。そのため平坦面の表土・耕作土(約1m)を除去し、遺構の検出を行った。その結果、竪穴住居跡1軒、堀立柱建物跡2棟を検出した。

遺物は、住居跡を中心として土器(壺・甕・鉢・高坏・甑等)、鉄器(鉄鏃・鉞・鑿・刀子等)、石器(砥石)が出土している。

2. 遺 構

1. 第1号住居跡(第3図・図版2a)

第1号住居跡は調査区の最高所(標高約67m)にあるが、丘陵北側のやや緩やかな斜面の落ち際に位置する。立地の関係で、北側床面のほとんどは流出している。推定される平面形式は方形である。残存する規模は、東西約4.4m、南北最大値2.1m、最小値0.7m、壁高は西側で最高0.7mである。現存する壁溝は壁に沿って北から東へ巡っている。溝の規模は幅約10cm、深さ概ね10cmである。溝内には壁留材を支えた杭穴と考えられるピットが5個ある。床面及び床面落ち際斜面より柱穴と考えられるピット2個を検出した。柱穴の規模は、P1が直径25cm、深さ40cm、P2が直径25cm、深さ35cmである。柱間距離は2.4mで、壁面や壁溝等との関係から支柱穴と考えられる。

遺物は、土器の破片が床面や埋土中及び斜面落ち際から出土している。

出土遺物(第4図・図版7)

土器 1, 2, 5~7が床面から、3, 4が埋土中からの出土である。

1は壺形土器の破片である。口縁部は欠損する。頸部は直立気味に立ち上がり、肩は張る。調整は肩部外面に刷毛目が残る他はすべてナデ仕上げ、肩部内面には指ナデ痕が残る。胎土は3mm大の砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。2~4は甕形土器の口縁部の破片である。細片のため口径は不明である。2はなだらかに外反し、端部は尖り気味に終わる。調整は外面がナデ仕上げ、口縁部内面はナデ仕上げ、体部内面はへら削りを施す。胎土は細砂粒を多く含み、焼成はやや不良、色調は赤褐色を呈する。3は断面「く」字状に外反し、端部は若干内傾させ、丸味をもって終わる。調整は内外面ともナデ仕上げである。胎土は細砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。4は断面「く」字状に外反し、端部は尖り気味に終わる。肩部にはへら状工具による刺突文が施されている。調整は内外面ともナデ仕上げである。胎土は2~3mm大の砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は濃茶褐色を呈する。5~7は底部破片である。復元低径は2.5cm、6が3.4cm、7が4.1cmで、いずれも明確な平坦面を残す。調整はいずれもナデ仕上げで胎土は2mm大の砂粒を多く含み、焼成は不良である。色調は5が暗橙褐色、6が茶褐色、7が暗黄褐色を呈する。

2. 第2号住居跡(第5図・図版2b)

第2号住居跡は調査区の中央部の丘陵尾根上の平坦面に位置する。建替え・拡張に伴う3軒分の重複が認められる(第2a住居跡~第2c住居跡)。土層観察の結果、第2a住居跡、第2b住居跡、第2c住居跡の順に建替え・拡張がなされたと考えられる。第2b住居跡の平面形式については隅円方形であるが、第2a住居跡については第2b住居跡に切られているため床面はほとんど残っておらず、また第2c住居跡についても西半部は削平を受けて残存していないため、それぞれの平面形式は不明である。

60 cm×短径50 cm、深さ65 cm、P6は長径40 cm×短径30 cm、深さ9 cm、P7が長径35 cm×短径30 cm、深さ45 cmである。柱間距離は、P1・P2間が2.2 m、P2・P7間が2.9 m、P7・P5間が2.2 m、(P7・P6間が1.2 m、P6・P5間が1.0 m)、P5・P1間が2.6 mである。このことから本住居跡は主柱を南北に長い長方形に配した4本柱構造の住居と考えられる。なお、P6は支柱であろう。床面には掘り込みは見られなかったが、中央から南寄りP1とP2との間に、直径1.3 m～1.4 mの範囲で赤黒く焼けた痕跡が見られ、この面を炉として使用していたと考えられる。

第2 c 住居跡は第2 b 住居跡を南にずらして建替えを行っている。床面は第2 a 住居跡の床面よりも約40 cm高い。削平を受けているため壁及び壁溝は西側にいくにしたがって消滅している。壁高は残存部で約0.15 mである。遺存する壁溝幅は20～25 cm、深さ概ね3 cmである。床面には柱穴と考えられるピットP8が1個ある。規模は直径40 cm、深さ65 cmである。この柱穴と他の柱穴との関係は不明である。

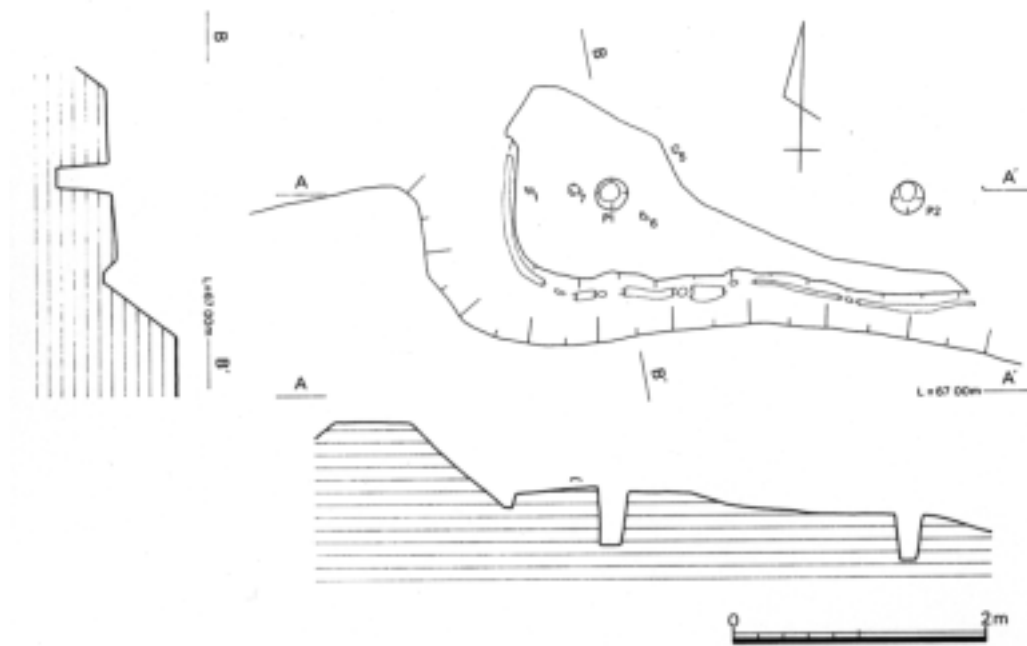
なお第2 b 住居跡床面の南東隅に、平面形式が円形で、断面フラスコ状を呈する土坑(SK1)一基を検出した。本土坑と各段階の住居跡との関係は、土坑埋土中から出土した土器が細片であるため確定するには至らなかったが、その検出位置や2 b 住居跡の壁溝と切り合っていることから第2 a 住居跡に伴うものと考えられる。規模は上面径が0.9 m、床面径が0.95 mで、深さが第2 a 住居跡の床面から約1.5 mである。屋内における食料貯蔵用の土坑と考えられる。

遺物は、土器片が第2 b 住居跡および第2 c 住居跡の床面から、また鉄鏃、砥石がそれぞれ第2 b 住居跡床面と埋土中から出土しているほか、各住居跡埋土中からも土器片が出土している。第2 b 住居跡と第2 c 住居跡の床面の出土土器の形態からみて、ほぼ同一時期と捉えられることから、両者の時間差はあまりないと考えられる。

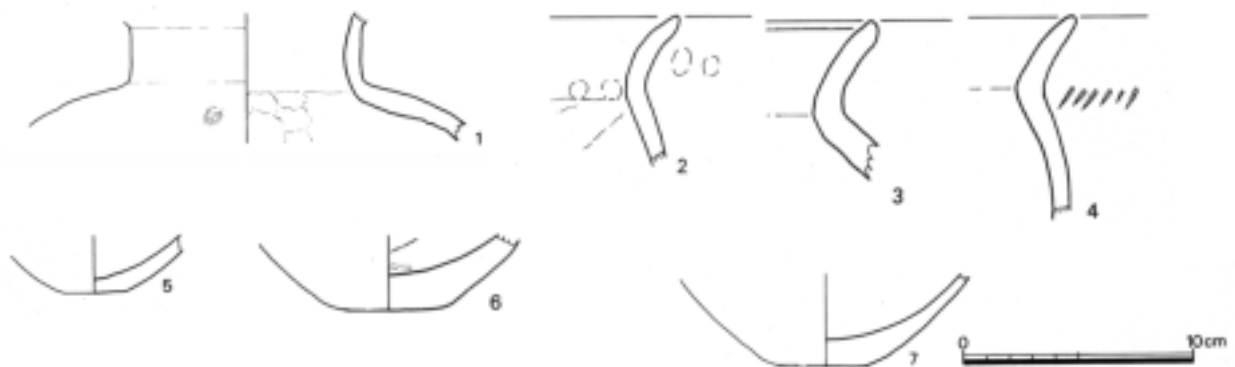
出土遺物(第6図、第7図・図版7、9)

土器 8～13は第2 c 住居跡、14～18は第2 b 住居跡、19は埋立中からの出土である。

8は複合口縁を呈する壺形土器の破片である。復元口径は16 cmである。強く外反する擬口縁部に直立する口縁がつく。肩部はなだらかに垂れる。調整は外面がナデ仕上げ、内面が口縁から肩にかけてはナデ仕上げ、体部はヘラ削りを施す。胎土は細砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は淡黄褐色を呈する。9～15は甕形土器の破片である。9は復元口径12.7 cm、体部最大径14 cmである。なだらかに外反する口縁を呈し、内傾しながらやや尖り気味に終わる。肩部は張らずなだらかに垂れる。体部最大径は中央にある。底部は復元径5 cmを測るが、破片のため僅かに観察できるだけである。調整は口縁内面及び外面全体はナデ仕上げ、体部内面にはヘラ削りを施す。口縁部と肩部との屈曲点外面は強くナデしているため、明確な段がついている。胎土は3～5 mm大の砂粒及び雲母片を多く含み、焼成はやや不良、色調は橙褐色を呈する。10は復元口径16.2 cm、体部最大径18.7 cmである。断面「く」字状に外反する口縁を呈し、端部は平坦面をもつ。肩部は張らずなだらかに垂れる。体部最大径はほぼ中央にある。調整は口縁部内面及び外面全体はナデ仕上げ、体部内面にはヘラ削りを施す。屈曲点外面は強くナデしているため、段がついている。胎土は1～2 mm大の砂粒を多く含み、焼成はやや不良、色調は橙褐色を呈する。11は復元口径13.2 cmである。外反する口縁を呈し、端部はさらに屈折させ、わずかな平坦面をもつ。調整は内外面ともナデ仕上げである。胎土は細砂粒を多く含み、焼成はやや不良、色調は暗赤褐色を呈する。12は復元口径は11.2 cm、体部最大径12.9 cmである。断面「く」字状に外反する口縁を呈し、端部は平坦面をもつ。体部は倒卵形を呈し、底部は欠損する。調整は肩部外面には刷毛目、底部近くにはミガキを施す。口縁部は内外面ともナデ仕上げ、体部内面は中央までナデ仕上げ、それ以下はヘラ削りを施す。胎土は細砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は黄橙褐色を呈する。13は復元口径18.4 cm、体部最大径16.2 cmである。強く外反する口縁を呈し、端部は平坦面をもつ。体部はあまり張らず、口径は体部最大径よりも大きい。調整は口縁内面及び外面全体はナデ仕上げ、体部内面はヘラ削りを施す。胎土は2～3 mm大の砂粒を多く含み、焼成はやや不良、色調は暗茶褐色を呈する。14は復元口径17.8 cmである。外反する口縁を呈し、端部は平坦面をもつ。調整は肩部には貝殻腹縁による刺突文が施され、それ以外の内外面はナデ仕上げである。胎土は2～4 mm大の砂粒を多く含み、焼成はあまく、器面は磨滅する。色調は濃橙褐色を呈する。15は復元口径11.3 cm、体部最大径は14.4 cmである。内傾気味に外反する口縁を呈し、端部は尖り気味に終わる。体部は球体を呈する。



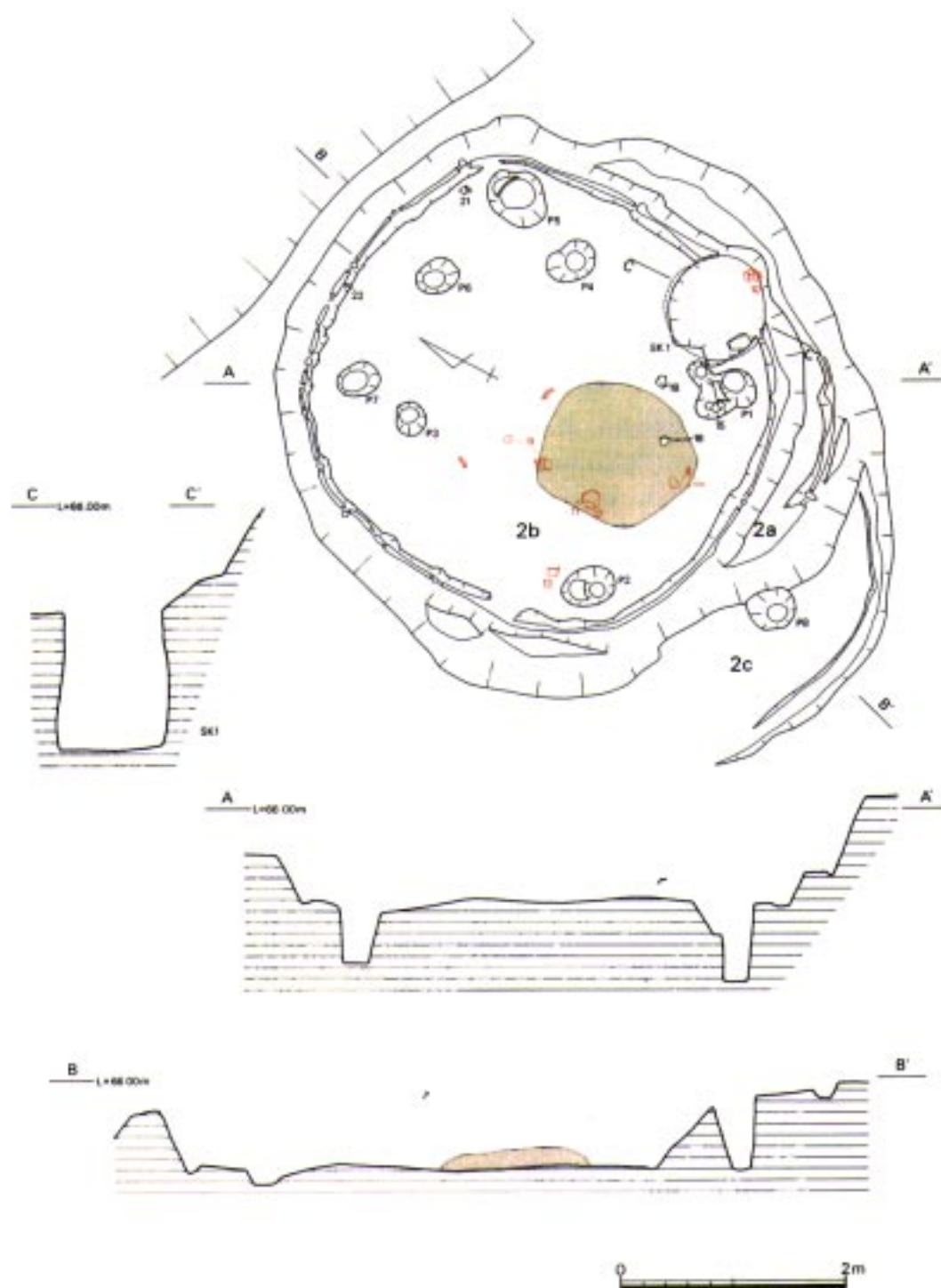
第3図 第1号住居跡実測図 (8 = 1 : 60)



第4図 第1号住居跡出土土器実測図 (8 = 1 : 3)

第2 a住居跡は東端部から南端部にかけて残存し、壁高は最大0.8mで、壁溝も南東隅に残存するのみである。壁溝の規模は幅が約15cm、深さが概ね3cmである。第2 a住居跡の主柱穴は、柱穴の位置と壁面との位置関係から、P1～P4が相当すると考えられる。各柱穴の規模は、第2 b住居跡床面レベルで、P1が長径35cm×短径25cm、深さ70cm、P2が長径50cm×短径35cm、深さ50cm、P3が長径30cm×短径25cm、深さ55cm、P4が長径45cm×短径35cm、深さ60cmである。柱間距離はP1・P2間が2.2m、P2・P3間が2.3m、P3・P4間が2.0m、P4・P1間は1.8mである。このことから本住居跡は主柱をやや台形に配した4本柱構造の住居と考えられる。

第2 b住居跡は第2 a住居跡を北西にずらして建替えを行っている。床面は第2 a住居跡の床面より約20cm低く造られている。規模は上面が南北方向4.5m、東西方向4.4mであり、床面積が約14㎡である。壁高は最大箇所0.7mである。壁溝は全周し、壁溝内には壁留材を支えた杭穴と考えられるピットが12個ある。壁溝の規模は幅25cm、深さ2～8cmである。床面には柱穴と考えられるピットが7個あるが、そのうち第2 b住居跡の柱穴には柱穴の位置と壁面との位置関係から、P1、P2、P5～P7が考えられる。そのうち深さなどから主柱穴にはP1、P2、P5、P7の4個があてはまると考えられる。このうちP1とP2は第2 a住居跡段階のものを共有している。柱穴の規模は、P5が長径



第5図 第2号住居跡実測図 (S=1:60) ※網目は焼土

調整は内外面ともナデ仕上げである。口縁部と肩部との屈曲点外面には強くナデ痕跡が一条めぐり、段がついている。胎土は5mm大の砂粒を多く含み、焼成はややあまく、器面は磨滅している。色調は濃橙褐色を呈する。16, 17, 19は鉢形土器の破片である。16は復元口径12.4cmである。やや内傾しながら逆「ハ」字状に外反する口縁を呈し、端部は尖り気味に終わる。調整は内外面ともナデ仕上げである。胎土は2~3mm大の砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は暗黄灰色を呈する。17は復元口径11cmである。わずかに外反する口縁を呈する。調整は外面が磨滅のため不明、内面はナデ仕上げである。胎土は2~3mm大の砂粒を多く含み、焼成は不良、色調は暗赤褐色を呈する。19はほぼ完形の土器で、器高最大9.2cm、口径13cmである。深い碗状を呈し、口縁部・体部は湾曲気味に立ち上がり、端部は丸味をもって終わる。底部は底径3.2cmとわずかに平坦面を残す。調整は外面が板ナデ、内面には三段にわたって強い指頭圧痕が残る。胎土はやや精緻で、雲母片を含み、焼成は良好、赤褐色を呈する。18は底部の破片である。復元底径は4.8cmである。底部は若干くぼむ。調整は外面は板ナデ、内面にはナデ痕跡が残る。胎土は1~2mm大の砂粒を多く含み、焼成はやや不良、色調は橙褐色を呈する。

鉄器 20は第2b住居跡床面からの出土である。

20は「定角式」鉄鏃である。茎部端が一部欠失している。残存長3.7cm、鏃身長1.9cm、幅1.2cm、厚さ0.35cmである。茎部は断面方形を呈し、最大幅0.6cm、厚さ0.4cmである。鏃は不明瞭であり、また関もあまり明瞭ではない。

石器 21, 22は第2b住居跡埋土中からの出土である。

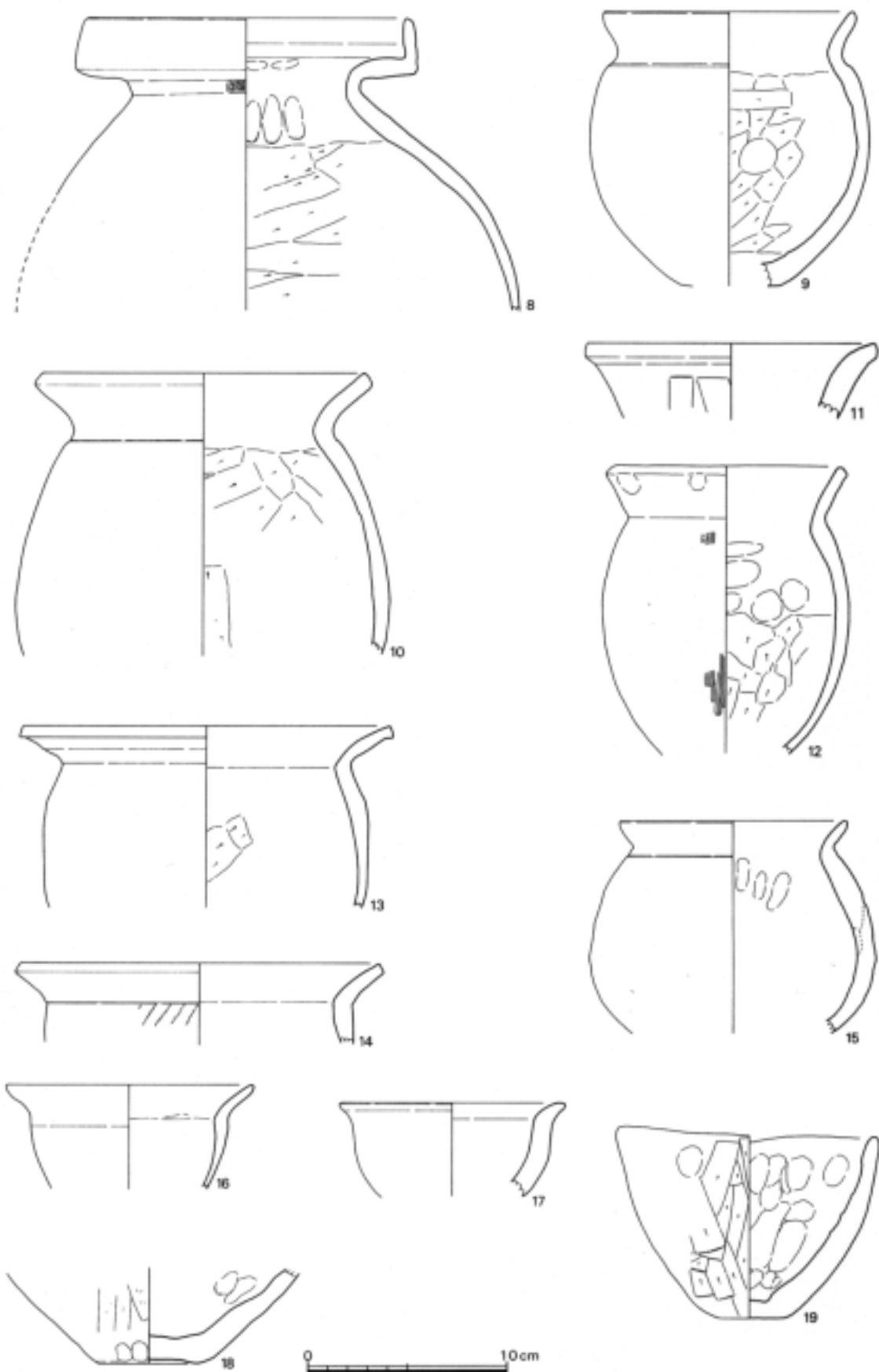
21は安山岩製と考えられる砥石である。現存長7.2cm、幅7.1cm、厚さ最大で3.2cmである。小口面の一面及び広口面の片面の一部が欠損している。完存する広口面の側面中央付近から対面の隅にかけて三角形の面をつくり、断面が不整五角形を呈する。広口及び残存する小口三面を使用面とする。いずれも擦痕が見られ、一部の面は凹みをもち、使用回数の多さを示している。22は流紋岩製と考えられる砥石である。残存長5.5~6.5cm、幅最大2.9cm、最小2cmである。断面台形の方柱状を呈する。小口の一方は欠損している。広口面の四面が使用され、それぞれ凹みをもつ。

3. 第3号住居跡 (第8図・図版3a, b)

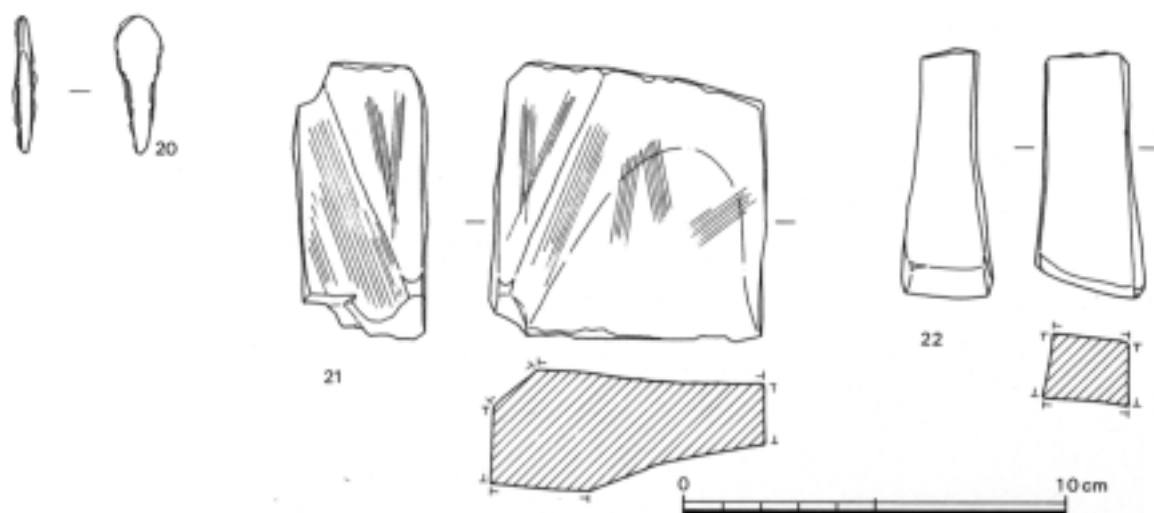
第3号住居跡は丘陵尾根上平坦部にあり、第2号住居跡の西側約2mのところに位置する。土層観察の結果、2軒分の建替え・拡張が認められる(第3a住居跡・第3b住居跡)。両者の新旧関係は、第3a住居跡が古く、第3b住居跡が新しい。第3a住居跡及び第3b住居跡の平面形式は、隅円方形である。なお第3b住居跡の東側に南北5.6m×東西0.7m、深さ約0.3mの規模の地山を削り込んだ痕跡が検出された。土層観察では確認できなかったが、床面と同一レベルで炭化物や川原石等が検出されたことから、この段も住居跡の可能性がある。しかし第3b住居跡の壁高を揃えるため、東側の斜面の高い方を削平して造り出した段とも考えられる。

第3a住居跡は、規模は上面が北西・南東方向4.1m、東北・南西方向3.7mであり、床面積が約13㎡である。残存する壁高は0.5mである。壁溝は検出されなかった。床面から柱穴と考えられるピットを6個検出したが、そのうち配置等から、第3a住居跡の主柱穴にはP1, P2, P3, P4があてはまると考えられる。柱穴の規模は、P1が長径30cm×短径25cm、深さ40cm、P2が長径45cm×短径30cm、深さ35cm、P3が長径35cm×短径30cm、深さ60cm、P4が直径30cm、深さ35cmである。柱間距離は、P1・P2間が2.2m、P2・P3間が2.0m、P3・P4間が2.2m、P4・P1間が2.2mである。このことから、本住居跡は主柱を正方形に配した4本柱構造を呈すると考えることができる。床面には明確な堀り込みはなかったが、直径1.0m~1.4mの範囲の焼土面があり、この位置が炉として使用されていたと考えられる。

第3b住居跡は第3a住居跡を東・南に拡張して造られていると考えられる。床面は第3a住居跡のそれよりも約15cm高い。推定される規模は上面が南北方向5.6m、東西方向4.8mである。床面積は約21㎡であり、第3a住居跡のそれに比べて約1.6倍になっている。残存する壁高は、最大箇所でも0.9mである。壁溝は検出されなかった。この段階の主柱穴はP1, P2, P5, P6, P7があてはまると考えられる。そのうちP1, P2は第3a住居跡段階のものを共有していると考えられる。柱穴の規模は、P5が長径40cm×短径30cm、深さ55cm、P6が直径35cm、深さ60cm、P7が長径35cm×短径20cm、深さ60cmである。柱間距離は、P1・P2間が2.2m、P2・P



第6图 第2号住居跡出土土器実測図(8=1:3)



第7図 第2号住居跡出土鉄器・石器実測図（S=1:2）

5間が2.1m, P5・P6間が1.8m, P6・P7間が1.8m, P7・P1間が2.0mである。このことから本住居跡は主柱を五角形に配した5本柱構造の住居と推定される。床面には明確な堀込みはなかったが、直径1.2mの範囲の焼土面を検出しており、この位置が炉として使用されていたと考えられる。また、その付近には、河原石2個があり、それぞれ20cm×30cmの平坦な面をもつことから作業台として利用されていたと考えられる。

なお第3a住居跡の床面からは平面形式が隅丸長方形を呈する土坑を2基検出した。第2号土坑（SK2）は、規模が上端長辺1.4m×短辺0.6m, 下端長辺1.4m×1.0m, 深さ約1mである。第3号土坑（SK3）は、規模が上端長辺1.3m×短辺0.8m, 下端長辺1.2m×短辺0.9m, 深さ北側0.5m, 南側0.8mであり、床面は南側に傾斜をもつ。第3b住居跡床面検出段階では検出・確認はできなかったことから、ともに第3a住居跡に伴う土坑と考えられる。それぞれ上端に比べて下端の幅が広く作られており、前述の第2a住居跡に伴う円形の土坑と同様、屋内における食料貯蔵の土坑と考えられる。

遺物は、土器片及び砥石が第3b住居跡埋土中から、また鉄製品（鉞）が第3a住居跡床面から出土しているほか、第3a住居跡土坑埋土中や各住居跡埋土中からも土器片が出土している。

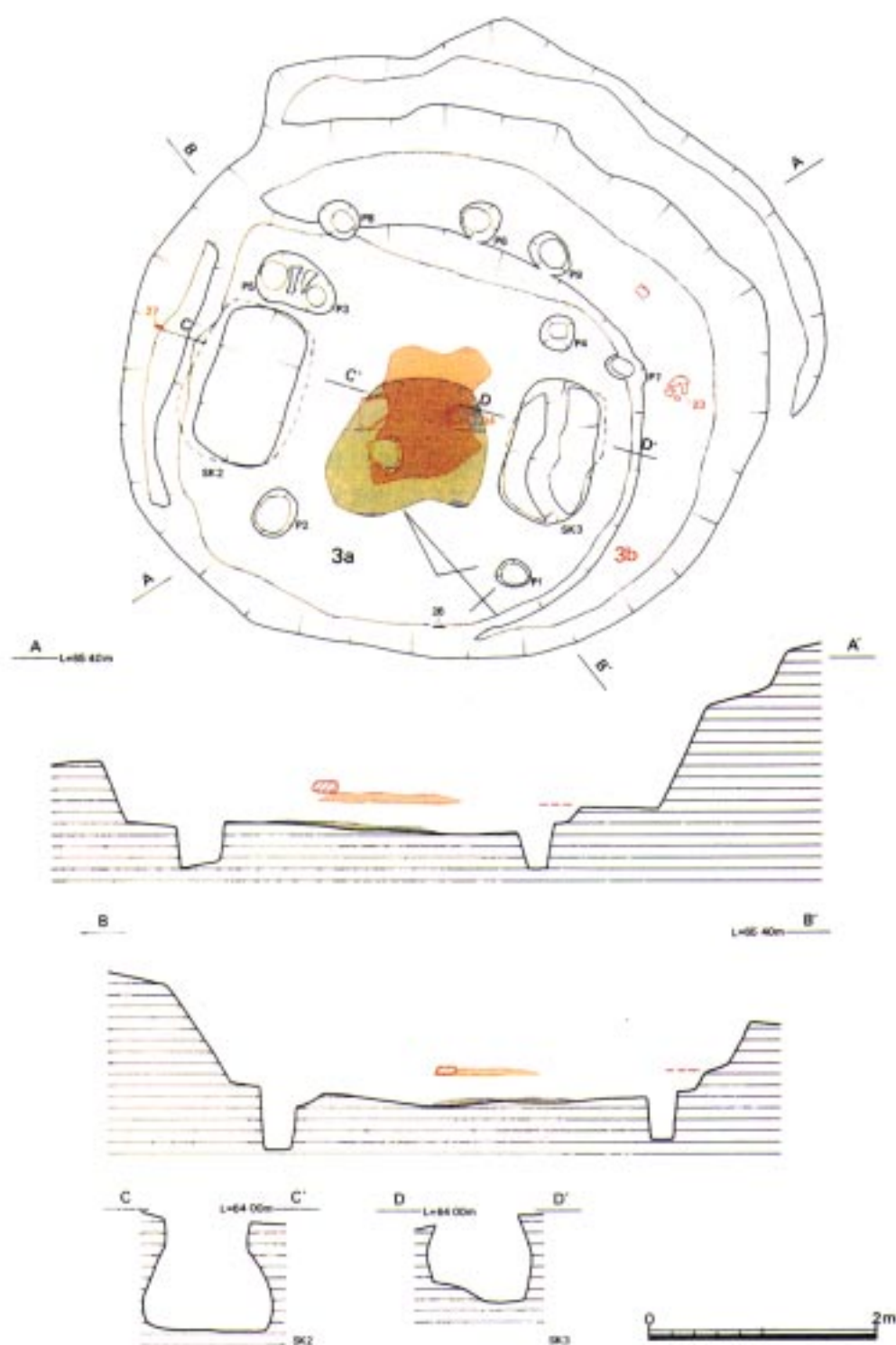
出土遺物（第9図、第10図・図版8、9）

土器 23, 24は第3b住居跡床面, 25は第2号土坑（SK2）埋土中からの出土である。

23は甕形土器の破片である。復元口径は11.7cmである。外反する口縁を呈し、端部は丸味を持って終わる。体部は倒卵形を呈し、底部は丸い。調整は口縁内外面ともナデ仕上げである。体部外面は磨減が激しいが、部分的に板ナデの跡が残る。体部内面は上半部には板ないしは貝殻による削りが施され、下半部はナデ仕上げである。底部外面近くには煤が付着する。胎土は1～3mm大の砂粒のほか、雲母片も多く含み、焼成は良好、色調は暗橙褐色を呈する。24は複合口縁を呈する壺形土器の破片である。口径は18.8cmである。擬口縁部は外反し、口縁部はやや直立気味に立ち上がり、やや端部は外反させ、丸味をもって終わる。調整は口縁部内外面ともナデ仕上げ、頸部内面は磨減のため調整は不明である。胎土は細砂粒を多く含み、焼成はあまく、色調は赤褐色を呈する。25は器種は不明であるが、形態・調整等からいわゆる「山陰型」甕形土器の基底部の破片と考えられる。復元底径は22cmである。底部は平坦で、やや斜めではあるが直線的に立ち上がる。調整は外面は刷毛目、内面は底部から5cmのところまでは刷毛目が、それ以上は横方向のヘラ削りが施される。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は黄褐色を呈する。

鉄器 26は第3a住居跡床面からの出土である。

26は鉞である。全長10cm, 刃部長2.2cm, 幅最大1.2cm, 茎部幅0.8cm, 厚さ推定



第8図 第3号住居跡実測図 (S=1:60) ※網目は焼土

0.3 cmである。刃部は鋸状を呈し、断面は三日月形の弧状をなしている。刃部は茎部との境付近から反り、更に刃先は反り上がっている。茎部には木質が残っており、この反対の面には樹皮の痕跡も観察できる。

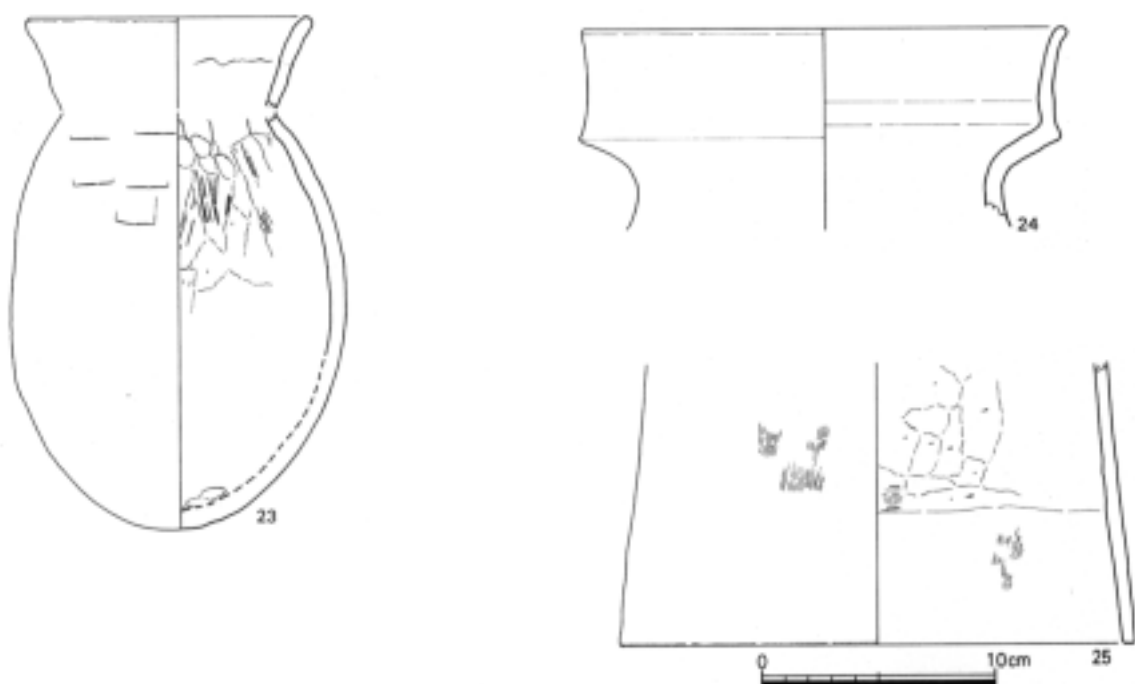
石器 27は第3 b住居跡からの出土である。

27は流紋岩製と考えられる砥石で、全長10.5 cm、幅最大2.6 cmである。方柱状を呈し、中央部が全体的に狭まっている。広口面のみ使用されており、小口は未使用である。使用面にはすべて擦痕が見られる。

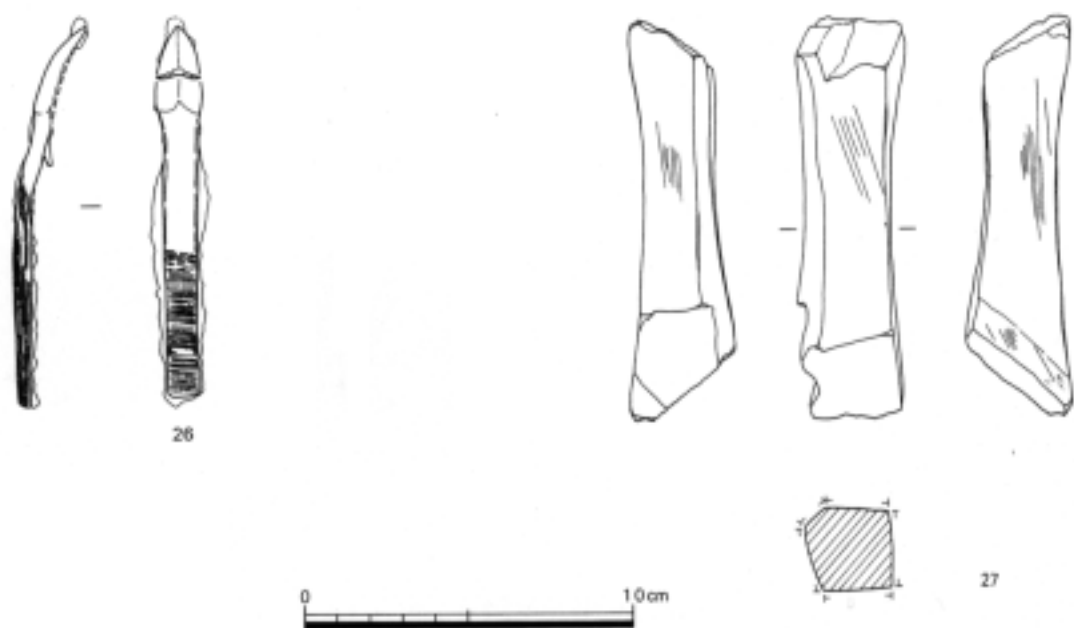
4. 第4号住居跡 (第11図・図版4 a)

第4号住居跡は丘陵尾根上の先端付近に位置し、第3号住居跡から北西方向に約2.2 m離れたところに位置する。土層観察の結果、2軒分の建替え・拡張が認められた(第4 a住居跡・第4 b住居跡)。両者の新旧関係は第4 a住居跡が古く、第4 b住居跡が新しい。平面形式は両者ともやや楕円形に近い隅円方形を呈する。

第4 a住居跡は推定規模で上面が北西・南東方向5.6 m、北東・南西方向4.6 mであり、床面積が約23 $\square$ である。壁高は最高所で約0.5 mである。壁溝は部分的(西隅)に残存するのみで、規模は幅約2.5 cm、深さ概ね1.0 cmである。床面から柱穴と考えられるピットを9個検出したが、この第4 a住居跡段階の主柱穴にはP1からP5或いはP2, P4, P7, P8の2通りが考えられる。柱穴の規模は、P1が長径40 cm×短径30 cm、深さ40 cm、P2が長径40 cm×短径35 cm、深さ30 cm、P3が長径42 cm×短径34 cm、深さ44 cm、P4が直径35 cm、深さ35 cm、P5が長径45 cm×短径40 cm、深さ35 cm、P7が直径35 cm、深さ45 cm、P8が長径40 cm×短径30 cm、深さ45 cmである。柱間距離は、前者の場合は、P1・P2間が2.4 m、P2・P3間が2.3 m、P3・P4間が2.4 m、P4・P5間が2.0 m、P5・P1間が2.0 mである。後者の場合は、P2・P6間が2.9 m、P6・P4間が2.1 m、P4・P7間が3.1 m、P7・P2間が2.5 mである。このことから本住居跡は、前者の場合であれば主柱を五角形に配した5本柱構造の住居が、後者の場合であれば主柱をやや北側の幅広の方形に配した4本柱構造の住居がそれぞれ想定できる。床面中央からやや東にかけて、約2.1 m×1.8 mのやや不整形な「堀り込み」が認められた。



第9図 第3号住居跡出土土器実測図 (S=1:3)



第10図 第3号住居跡出土鉄器・石器実測図(8=1:2)

この「堀り込み」は、埋土中に炭化物を含んでおり炉跡と考えられる。

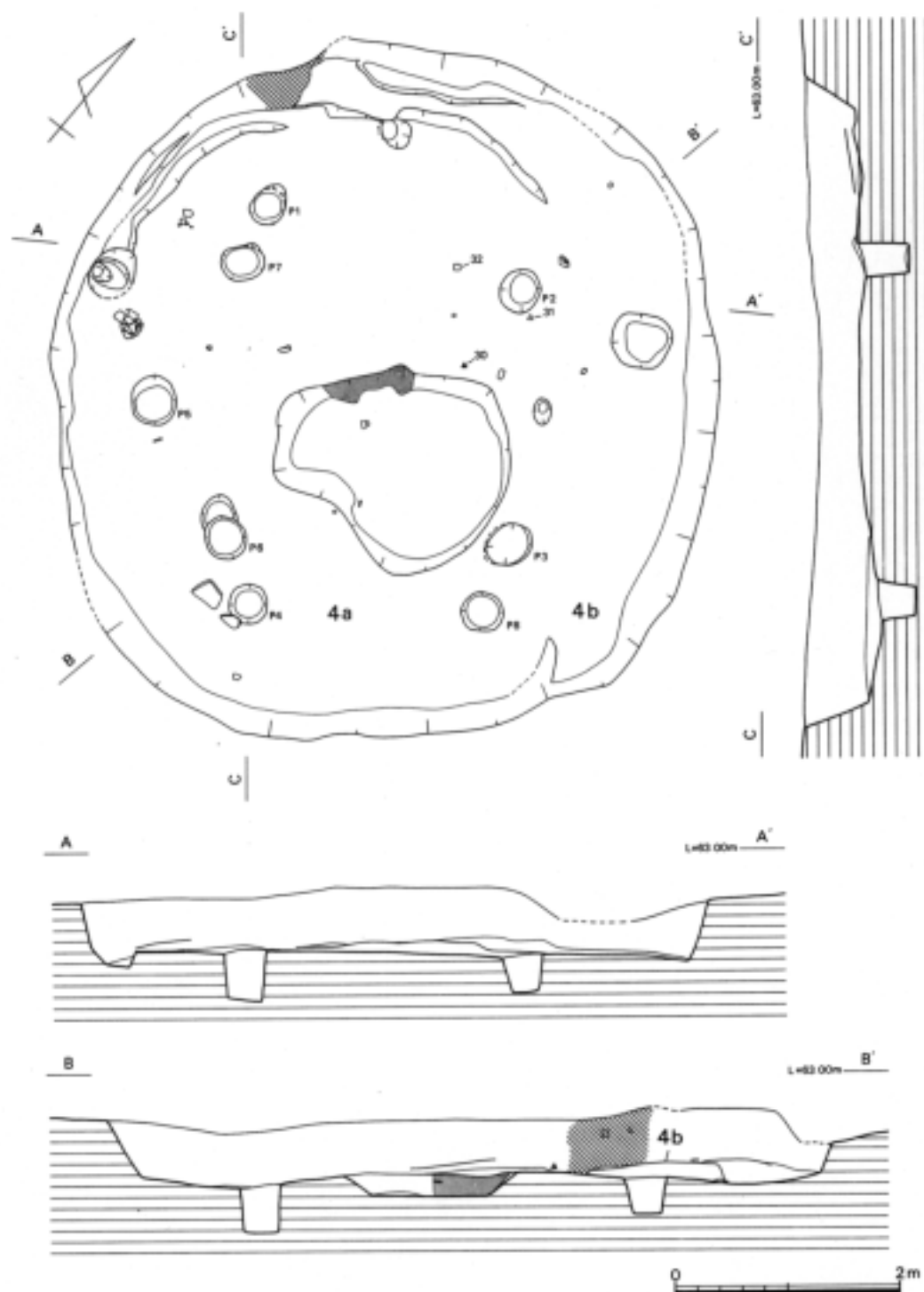
第4b住居跡は第4a住居跡を北側から東北側にかけて拡張して構築されている。第4b住居跡の規模は上面が北西・南東方向、北東・南西方向とも5.8mである。床面積は約30㎡であり、第4a住居跡のそれよりも約1.3倍になっている。床面は第4a住居跡よりも8~10cm高い。壁高は最高所で約0.6mである。壁溝は北西壁に沿って一部が残存する。規模は幅約15cm、深さ3~4cmである。北西壁の一部は岩盤を削っていることが観察できた(斜線箇所)。この第4b住居跡に伴うと考えられる主柱穴には、P2、P3、P6、P7が考えられる。このうちP2、P3、P7は第4a住居跡段階のものを共有している。柱穴の規模は、P2が直径40cm、深さ30cm、P3が長径40cm×短径35cm、深さ45cm、P6が長径40cm×短径35cm、深さ45cm、P7が長径40cm×短径30cm、深さ45cmである。柱間距離は、P2・P3間が2.3m、P3・P6間が2.5m、P6・P7間が2.5m、P7・P2間が2.5mである。このことから本住居跡は主柱を方形に配した4本柱構造の住居と推定できる。床面中央からは第4a住居跡と重複・切り合っているが、炉跡状の「堀り込み」が検出され、北西壁には赤黒く焼けた面が認められた。その位置から、本住居跡に伴う炉の痕跡と考えられる。

遺物は、第4b住居跡の床面から土器片、鉄器(鉄鏃)が出土したほか、第4b住居跡の埋土中からも土器片、鉄器(鉄鏃)、砥石が出土している。

出土遺物(第12図、第13図・図版8、9)

土器 28、29は第4b住居跡埋土中からの出土である。

28は甕形土器の破片である。復元口径は18cmである。外反する口縁を呈し、端部はやや丸味を帯びる平坦面をもつ。調整は内外面ともナデ仕上げであるが、内面屈曲部付近は板ナデ仕上げである。胎土は2~3mm大の砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は橙褐色を呈する。29は高坏形土器の破片である。復元口径19.3cmである。やや浅い坏身を呈し、強く外反しながら開く口縁を呈する。端部は若干折り曲げ、断面鑿頭状を呈している。調整は坏部外面が下半部に刷毛目、上半部はナデ仕上げである。内面はナデ仕上げである。胎土は細砂粒及び1mm大の砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は黄橙褐色を呈する。



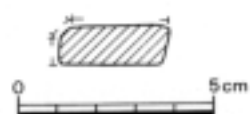
第11図 第4号住居跡実測図 (S = 1 : 60) ※網目は焼土、斜線は岩盤



第12图 第4号住居跡出土土器実測図 (8 = 1 : 3)



32



第13图 第4号住居跡出土鉄器・
石器実測図 (8 = 1 : 2)

鉄器 30は第4 b住居跡床面, 31は第4 b住居跡埋土中からの出土である。

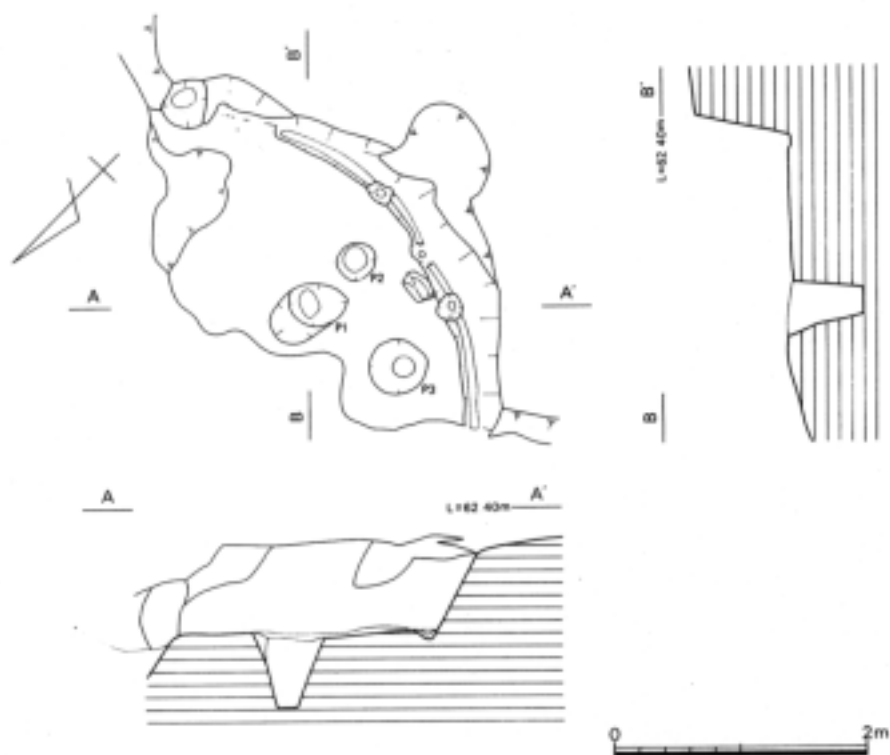
30は圭頭斧箭式もしくは「定角式」の鉄鏃である。全長4.5 cm, 刃部幅1.7 cm, 厚さ0.4 cm, 茎部幅0.5 cm, 厚さ0.35 cmである。刃部は平面形が三角形を呈している。鏃は入らず, 断面レンズ状を呈している。不明瞭であるが, 関が観察される。茎部断面は方形を呈する。31は鑿頭式鉄鏃である。鏃身の一面は錆のため欠失している。全長3.8 cm, 鏃身長は約2 cm, 幅約1 cm, 厚さ約0.4 cmである。錆のため, 刃部の遺存状況はよくない。茎部断面は方形を呈する。

石器 32は第4 b住居跡埋土中からの出土である。

32は石英安山岩製と考えられる砥石で, 全長10.5 cm, 幅最大3 cm, 最小2.2 cm, 厚さ1 cmである。使用面は側面と広口面のうちの一面である。

5. 第5号住居跡 (第14図・図版4 b)

第5号住居跡は第4号住居跡の約3 m北の緩やかな丘陵斜面の落ち際に位置する。すでに大半は削平を受けており, 南西隅しか検出できなかった。残存する規模は北東・南西方向2.6 m, 北西・南東方向2.0 mである。壁高は最高所で0.7 mである。壁溝は北西から南隅を過ぎたあたりまで巡る。規模は幅約10 cm, 深さ概ね5 cmである。溝内には壁留材を支えた杭穴と考えられるピットが3個堀り込まれていた。床面には柱穴と考えられるピットが3個ある。柱穴の規模は, P1が長径50 cm×短径35 cm, 深さ60 cm, P2が直径30 cm, 深さ50 cm, P3が直径40 cm, 深さ50 cmである。なおこ



第14図 第5号住居跡実測図 (8 = 1 : 60)

の住居跡は残存状態が悪く、上屋構造は不明である。なおP3と壁溝の間の床面には平坦面を上にして、あたかも据えられたような状態での川原石を検出した。平坦面は丁寧に磨かれており、作業台として利用されていたと考えられる。

遺物は、床面から土器片数点、埋土中から土器片多数、鉄器（鉞、刀子）が出土している。

出土遺物（第15図、第16図・図版9）

土器 33, 34とも埋土中からの出土である。

33, 34は甕形土器の破片である。いずれも口径の復元は不可能であった。33は強く外反する口縁を呈し、端部は尖り気味に終わる。調整は口縁部内面及び口縁部外面から肩部はナデ仕上げ、肩部内面はヘラ削りである。胎土は細砂粒をわずかに含み、焼成はやや不良、色調は暗橙褐色を呈する。34は緩く逆「ハ」字状に外反する口縁を呈し、端部は丸味をもって終わる。調整は内外面ともナデ仕上げである。胎土は細砂粒を多く含み、焼成はやや不良、色調は黄褐色を呈する。

鉄器 35, 36は埋土中からの出土である。

35は鉞である。全長7.4m, 刃部長1.7cm, 茎部幅0.65cm, 厚さ0.35cmである。刃部は、鋺状を呈し、断面は三日月形の弧状をなしている。柄部と刃部との境付近から弱く反り気味になる。茎部には木質等の痕跡は認められなかった。36は刀子である。全長4.8m, 刃部長2.6cm, 幅1.25cmの小型品である。不明瞭であるが両関をつくる。茎部の断面は方形を呈する。

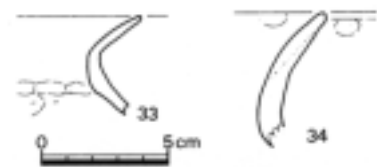
6. 第6号住居跡（第17図・図版5b）

第6号住居跡は第1号～第5号住居跡の立地する丘陵尾根上により、西狭い平坦面に立地する。この狭い平坦面は幅約7mしかなく、その西側は面は現在まで耕作に利用されており、削平・攪乱等が認められた。なお、この平坦面は、もともとの地形を利用したものというよりは、むしろ斜面を削って意図的に作り出したものと考えられる。

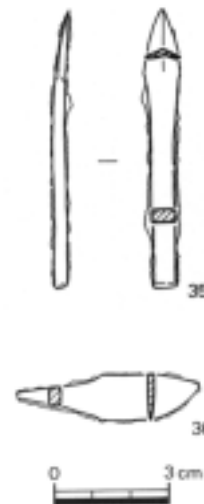
第6号住居跡は平面形式が隅円方形を呈する。西壁は流失しており遺存していない。規模は上面が、南北6.4m, 東西は現存で5.5mであり、床面積が約32㎡である。壁高は最大箇所0.5mである。壁溝は南壁の壁面が現存するところから北壁の途中まで「U」字状に巡る。規模は幅約10cmで、深さ概ね5cmである。床面から柱穴と考えられるピットを5個検出した（P1～P5）。柱穴の規模はP1が長径55cm×短径30cm, 深さ35cm, P2が長径60cm×短径50cm, 深さ75cm, P3が直径30cm, 深さ60cm, P4が直径50cm, 深さ55cm, P5が長径50cm×短径40cm, 深さ45cmである。柱間距離は、P1・P2間が2.3m, P2・P3間が2.1m, P3・P4間が1.8m, P4・P5間が2.3m, P5・P1間が3.7mである。このことから、本住居跡は主柱をやや南北に長い長方形に配した5本柱構造を呈する住居であったと考えることができる。床面の中央には、上面1.0m×0.9m, 深さ15～25cmの規模の不整な楕円形を呈する掘り込みがあり、その北面には赤黒く焼けた面が見られることから、この掘り込みは第6号住居跡の炉と考えられる。また床面上P4の北傍において平坦な面を上にした状態で川原石を検出しており、作業台として利用されていたと考えられる。東壁上面には柱穴と考えられる数個のピットが本住居跡との切り合い関係にあり、また中央には、上面0.9m×0.3m, 深さ20～25cmの規模の段状の「掘り込み」がある。なおこの「掘り込み」が本住居跡と切り合い関係にあるのか、それとも付属するものかについては確認できなかった。

遺物は、床面から土器片（甕形土器）、またP1埋土中からも鉄器（鉄鏃）が出土しているほか、埋土中からも土器片や石器（砥石）及び鉄器（鉄鏃、鏝）が出土している。

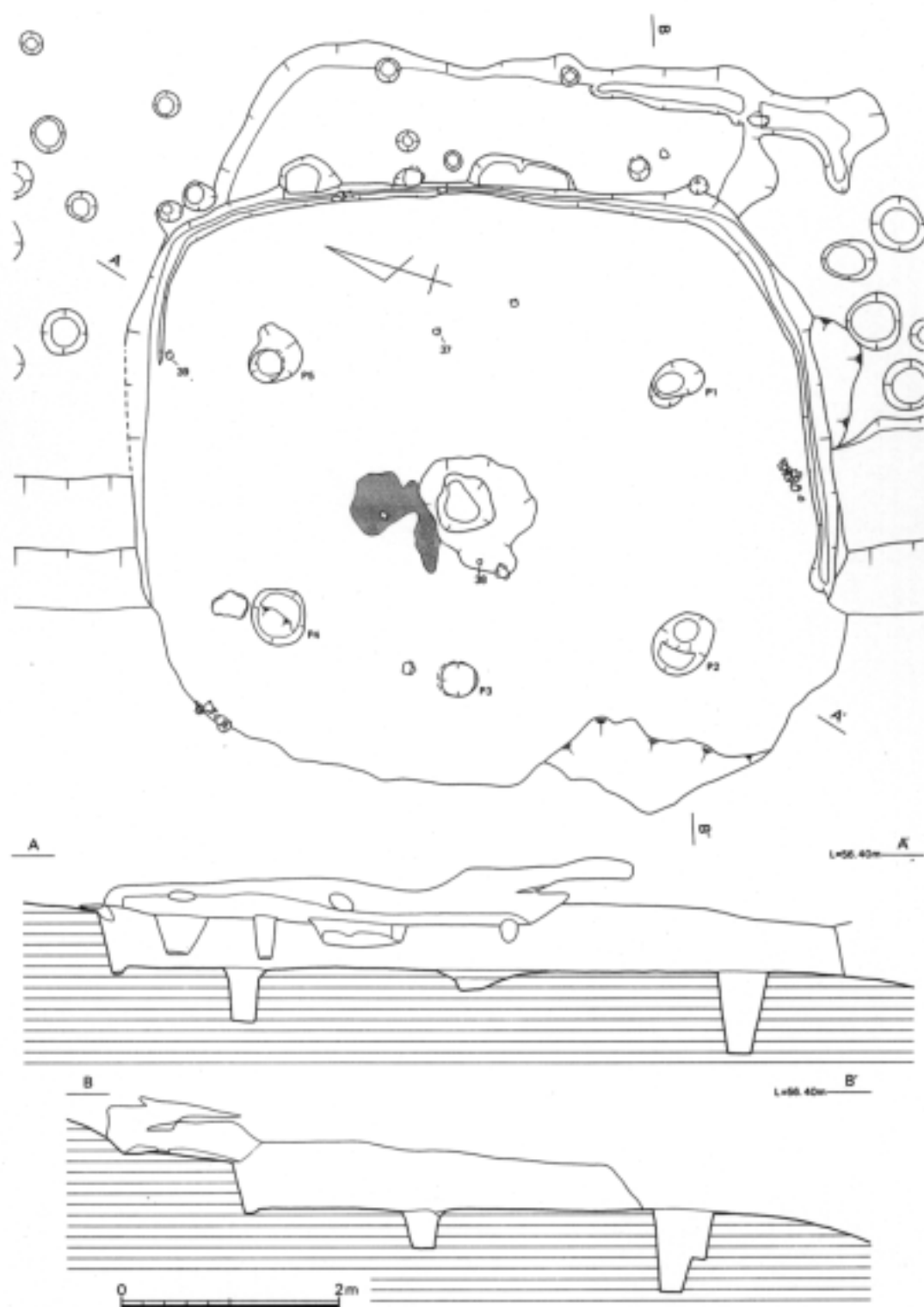
ところで東壁の上面から、やや長方形に近い形に地山を掘り込んだ跡を検出した。規模は上面が南北5.0m, 東西1.1mで、上面は削平を受けているためか深さは5cm～25cmと均一ではない。この掘



第15図 第5号住居跡出土土器実測図(8=1:3)



第16図 第5号住居跡出土鉄器実測図(8=1:2)



第17図 第6号住居跡実測図 (S = 1 : 60) ※網目は焼土

り込み内の床面からも柱穴と考えられるピットを6個以上検出した。なお、この掘り込みの時期については、土層観察からも、また床面から検出された土器片が細片のため明らかにできなかった。このため、この掘り込んだ跡が本来独立して何らかの施設として存在していたのか、第6号住居跡に付属するものなのかについては確認はできなかった。

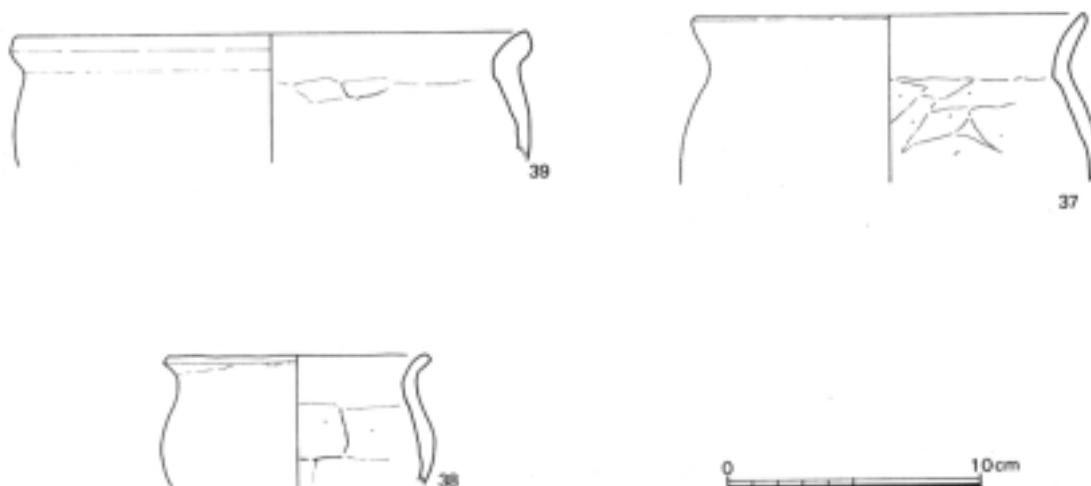
出土遺物 (第18図, 第19図・図版8, 9)

土器 37～39床面からの出土である。

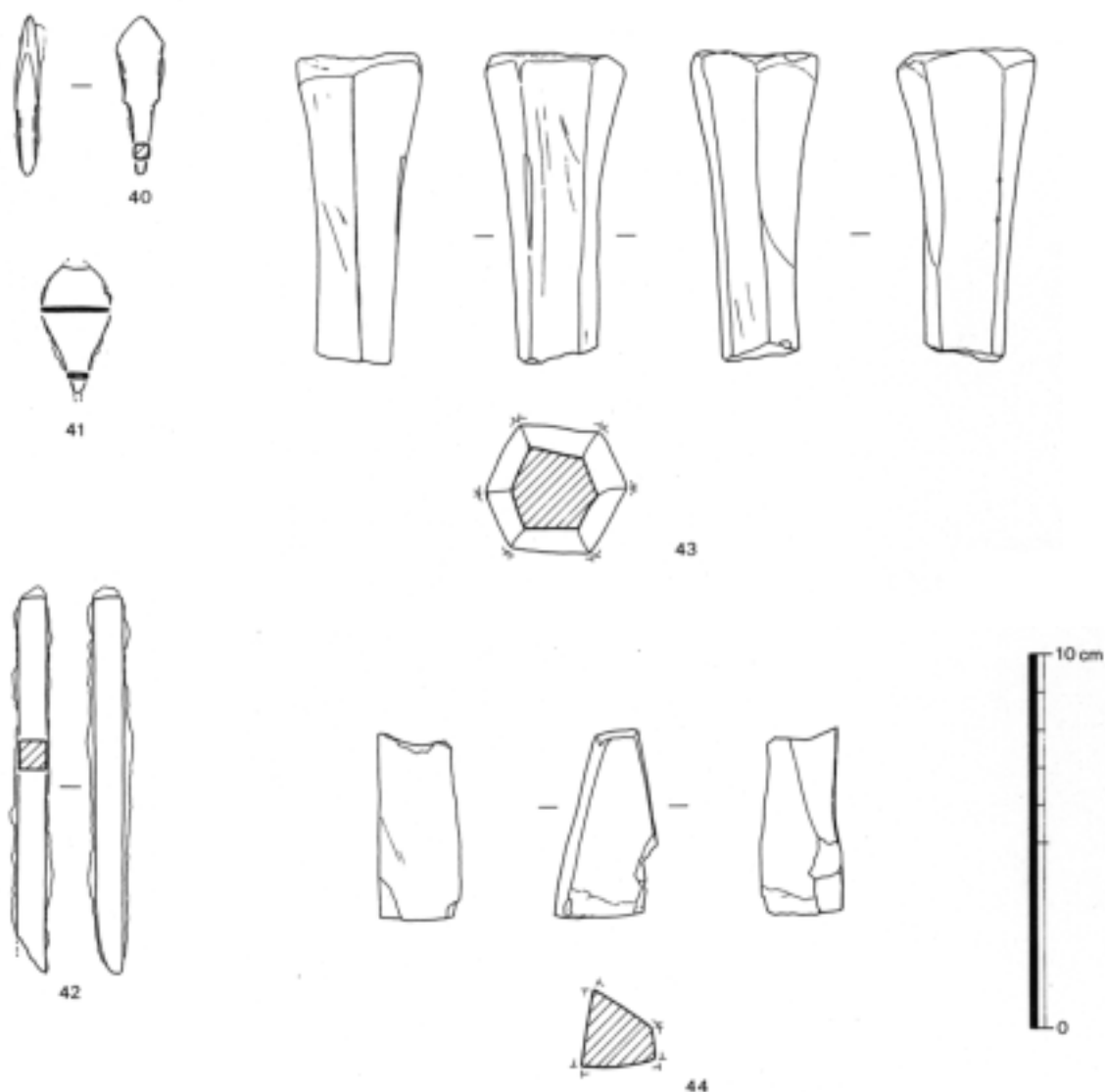
37～39は甕形土器の破片である。37は復元口径は15.4cmである。緩く逆「ハ」字状に外反する口縁を呈し、端部は丸味を持ちつつ若干尖り気味に終わる。調整は外面がナデ仕上げ、内面は口縁部がナデ仕上げ、体部はヘラ削りを施す。胎土は2～3mmの砂粒を多く含み、焼成はやや不良、色調は黒灰色を呈する。38は復元口径10.2cmである。強く外反する口縁を呈し、端部は平坦面をもつ。口縁部と肩部との境はあまり明確ではない。調整は外面がナデ仕上げ、内面は口縁部がナデ仕上げ、体部はヘラ削りを施す。胎土は1mm大の砂粒を多く含み、焼成はやや不良、色調は黄褐色を呈する。39は復元口径は20cmである。断面「く」字状に外反する、短い口縁を呈し、端部は磨滅するが平坦面をもつものと考えられる。体部は若干張り気味である。調整は内外面ともナデ仕上げである。胎土は2～3mm大の砂粒を多く含み、焼成はやや不良、色調は黒褐色を呈する。

鉄器 41, 42は埋土中からの出土である。40は試掘トレンチ内からの出土であるが、本住居跡掘形(掘方)検出時の出土であるため、埋土中として扱う。

40は「定角式」鉄鏃である。全長4.3cm, 鏃身2.3cm, 幅1.2cm, 厚さ0.6cmである。刃部両面には明確な鑄は見られなく、断面レンズ状を呈する。41は柳葉形を呈する鉄鏃である。刃部及び茎部の両端は欠失している。残存長は3.3cm, 刃部幅1.9cm, 厚さ0.1cmである。茎



第18図 第6号住居跡出土土器実測図 (8=1:3)



第19図 第6号住居跡出土鉄器・石器実測図(8=1:2)

部断面は方形を呈する。42は鑿である。全長10.1cm, 幅0.8cmであり, 断面正方形の棒状を呈する。錆のため先端部の状況は不明確である。突き鑿であろう。

石器 43, 44とも埋土中からの出土である。

43は流紋岩製と考えられる砥石で残存長8.2cm, 厚さ中央部2.3cm, 端部3.8cmである。断面はやや正六角形を呈し, 形態は中央部が狭まり端に行くにしたがって広がっている。片方の端は欠損している。広口面六面を使用面とし, いずれも擦痕が残っている。また六面のうち一面には強い凹みを有する。44は流紋岩製と考えられる砥石で全長5cm, 幅1.9cm, 厚さ2.1cmである。平面形態が三角形を呈し, その二つの隅は欠損している。断面は不整の台形を呈している。広口面四面を使用面とし, 一部擦痕がみられる。

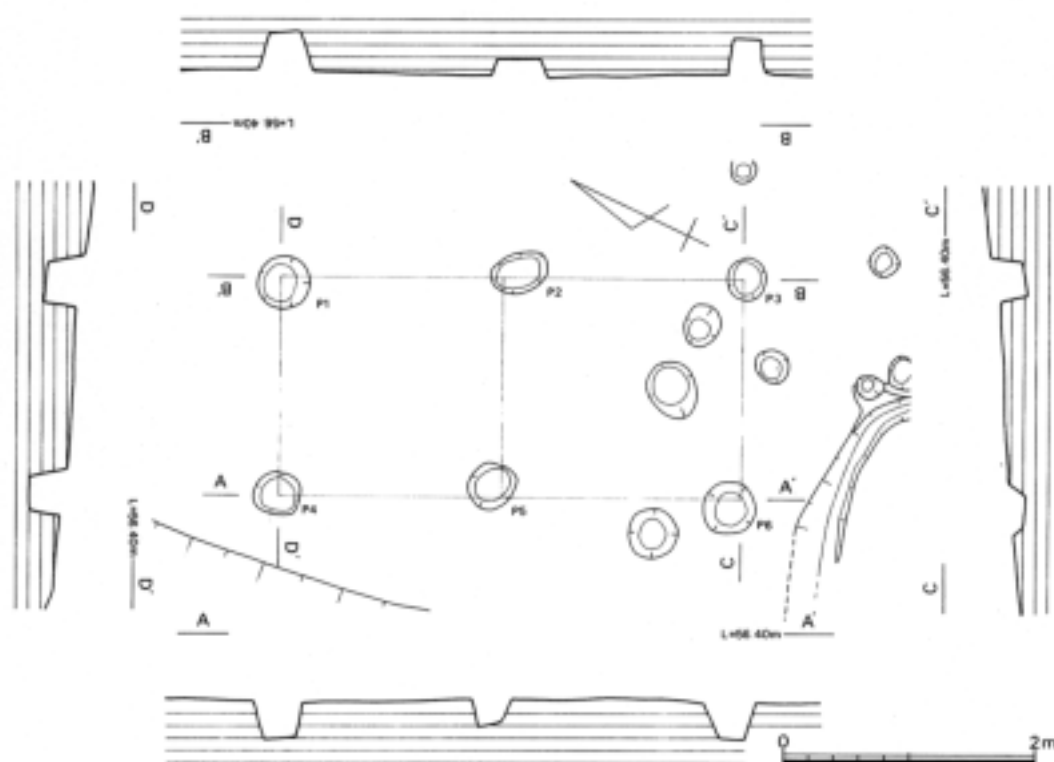
7. 掘立柱建物跡(第20図, 第21図・図版6a, b)

埋立柱建物跡は, 第6号住居跡の位置する平坦面上から, 第6号住居跡を挟んで北側と南側に2棟を検出した。両遺構は棟方向を尾根線と平行して構築されている。北側を第1号掘立柱建物跡, 南側を第2号掘立柱建物跡とする。両者とも柱穴の深さから, 全体的に耕作による削平を受けていることが認められた。なお第6号住居跡とは, その位置関係から同時に建てられた可能性は低く, その前後に造られたものと考えられる。

えられる。しかしながら新旧関係については不明である。また本遺構の性格については、平面形態では掘立柱建物跡と高床建物跡の区別はつきにくい、柱穴や柱間の規模の点から高床式建物跡（或いは倉庫跡）と考えるよりも平地式建物跡である可能性が高い。

第1号掘立柱建物跡は、第6号住居跡の北側約0.5～4mのところにある。規模は、桁行2間（3.7m）×梁間1間（1.8m）である。柱穴の規模は、P1が直径40cm、深さ25cm、P2が長径45cm×短径30cm、深さ20cm、P3が長径35cm×短径30cm、深さ25cm、P4が長径40cm×短径30cm、深さ30cm、P5が直径40cm、深さ20cm、P6が直径40cm、深さ30cmである。柱穴内から遺物は出土していないため、時期は不明である。

第2号掘立柱建物跡は、第6号住居跡の南側約1～5mのところにある。規模は、桁行が2間（4.0m）×梁間1間（1.4m）である。柱穴の規模は、P1が直径50cm、深さ25cm、P2が直径45cm、深さ55cm、P3が長径55cm×短径50cm、深さ45cm、P4が直径45cm、深さ15cm、P5が直径40cm、深さ20cm、P6が直径45cm、深さ25cmである。柱穴内から遺物は出土していないため、時期は不明である。

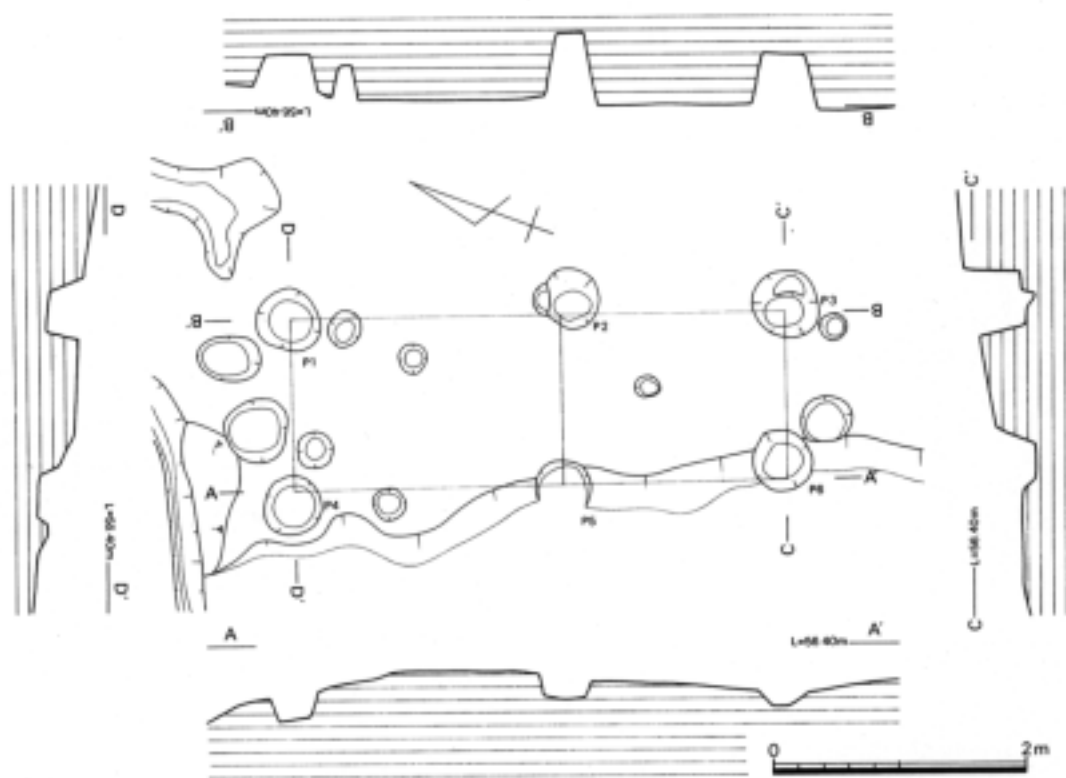


第20図 第1号掘立柱建物跡実測図 (S=1:60)

8. 土墳墓 (第22図・図版6c)

丘陵尾根上平坦面にあり、第3号住居跡と第4号住居跡の間において検出した。第3号住居跡から北西約9m、第4号住居跡から南東約12mのところにある。

この土墳墓は、東壁隅を重機によって削られていたが、規模は、検出面が長辺2.8m×短辺1.2m、床面が長辺2.3m、短辺は南端0.9m、北端0.8m、深さが南端0.6m、北端0.8mである。長辺方位はN31°Eで、丘陵尾根線に直交している。床面は中央にいくに従って若干深くなっているもののほぼ平坦である。床面には北辺を除いて三辺の壁近くに溝が見られた。溝の規模はそれぞれ南辺が長さ90cm、幅15cm、深さ約15cm、東辺が長さ195cm、幅15cm、深さ約5cm、西辺が長さ180cm、幅15cm、深さ約5cmである。これらは、恐らく木棺の棺材つまり両側板と南小口板を差し込んだ溝と考えられ、溝の配置から□状の木棺を想定することができる。木棺の内法を推定すれば、2m×0.8m程度と考えられる。なお頭位方向は、南小口側がやや広めになっており、また南小口



第21図 第2号船立柱建物跡実測図 (S=1:60)

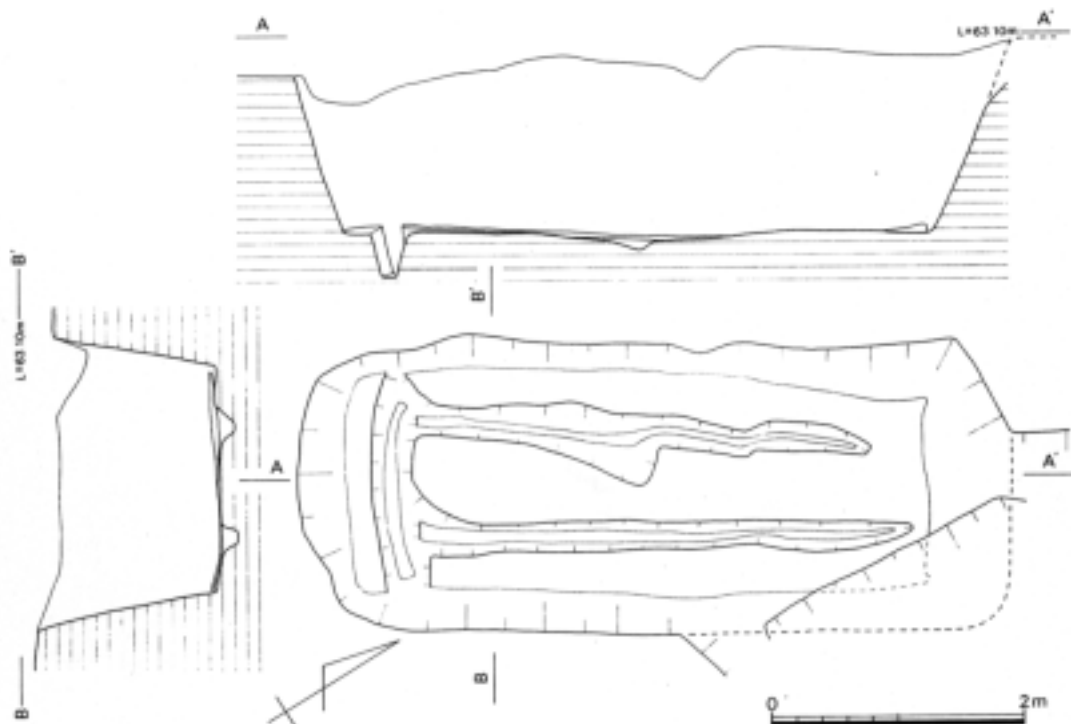
のみに溝が掘り込まれていることから、南頭位であったと考えられる。なお棺内からは遺物が出土していないので、時期及び各住居跡との関係は不明である。

9. 調査区内出土遺物 (第23図・図版8)

調査区内からも土器片を多く採集している。しかしながら復元図化できるものは少ない。

45～52は第6号住居跡上面の攪乱層からまとまって出土した土器群である。53, 54は第6号住居跡が立地する丘陵西側下平坦面における包含層出土の土器である。また、55は丘陵尾根上の表土中から採集されている。

45は壺形土器の破片である。復元口径18.4cmである。なだらかに外反する擬口縁部に内傾しながら直線的に複合口縁部が立ち上がる。調整は内外面ともナデ仕上げで、屈曲部に強い指頭圧痕が見られる。胎土は2～3mm大の砂粒及び雲母片を含み、焼成はやや不良、色調は暗黒褐色を呈する。46～54は甕形土器の破片である。46は復元口径約13cmである。強く外反する口縁を呈し、口縁端部は若干肥厚させ、二条の凹線が巡る。調整は内外面ともナデ仕上げである。頸部に強いナデの跡が残る。胎土は細かい砂粒を含み、焼成は良好、色調は淡橙褐色を呈する。47は復元口径15.8cmである。逆「ハ」字状に外反する口縁を呈し、端部は明確な平坦面をもつ。肩部はやや張り、なだらかに垂れる。調整は内外面ともナデ仕上げである。肩部内面には指頭圧痕が残る。胎土は2～3mm大の砂粒及び雲母片を含み、焼成はやや不良、色調は暗黄褐色を呈する。48は復元口径16.2cmである。逆「ハ」字状に外反する口縁を呈し、端部は明瞭な平坦面をもつ。調整は外面がナデ仕上げ、内面が口縁端部付近はナデ仕上げ、それ以下は横方向の粗い刷毛目もしくは二枚貝腹縁による条痕文が施される。口縁端部の内外面は指ナデのため若干へこむ。胎土は1～2mm大の砂粒を多く含み、焼成は良好、色調は黒黄褐色を呈する。49は復元口径19.5cmである。逆「ハ」字状に外反する口縁を呈し、端部は平坦面をもつ。調整は内外面ともナデ仕上げである。口縁部外面に幅7mm程度のくぼみが巡っている。胎土は1mm大の砂粒を含み、焼成はやや不良、色調は淡黄橙褐色を呈する。50は復元口径13.4cmである。逆「ハ」



第22図 土坑墓実測図 (S=1:30)

字状に外反する口縁を呈し、端部は平坦面をもつ。肩部は張らずなだらかに垂れる。調整は外面がナデ仕上げ、内面が口縁部から肩部にかけてナデ仕上げ、体部には横方向の削りが施されている。胎土は2～3mm第の砂粒を含み、焼成はやや不良、色調は黄灰色を呈する。51は復元口径17.7cmである。内傾気味に逆「ハ」字状に外反する口縁を呈し、端部は平坦面をもつ。調整は内外面ともナデ仕上げである。口縁部から屈曲部外面に煤が付着している。胎土は2mm大の砂粒の他に5mm大の砂粒及び雲母片を含み、焼成は不良、色調は暗黄褐色を呈する。52は復元口径13.2cmである。逆「ハ」字状に口縁を呈し、端部は平坦面を持つ。肩部は張らずなだらかに垂れる。調整は外面がナデ仕上げ、内面が口縁から肩部までナデ仕上げ、体部には縦方向のへら削りが施されている。なお外面肩部は強いナデのためか若干の段をもち、また体部には指頭圧痕が残る。なお体部外面には煤が付着している。胎土は細砂粒の他3～4mm大の砂粒を含み、焼成はやや不良、色調は褐色を呈する。53、54はいずれも口縁部が若干外反しながら立ち上がる複合口縁を呈する。53は復元口径18.3cmである。口縁端部は若干外反する。口縁部下端は横方向に尖り気味に突出する。肩はやや張り気味である。調整は外面がナデ仕上げ、内面が口縁部から頸部にかけてはナデ仕上げ、それ以下はへら削りを施す。胎土は精緻、焼成はやや不良、色調は淡黄褐色を呈する。54は口縁端部が尖って終わる。内外面とも磨滅が激しく、調整は不明である。胎土は細砂粒を含み、焼成はやや不良、色調は淡黄褐色を呈する。55は須恵器の高台付きの坏身の破片である。復元高台径は10.1cmである。口縁部は欠損する。調整は内外面ともロクロによるナデ仕上げである。底部はへら切り未調整である。胎土は精緻、焼成は良好、色調は青灰色を呈する。



第 23 図 調査区内出土遺物実測図 (8 = 1 : 3)

Ⅳ ま と め

上深川北遺跡は椎村山から西へ派生した丘陵尾根上に位置する遺跡で、この度の発掘調査において堅穴住居跡 6 軒、掘立柱建物跡 2 棟、土墳墓 1 基を検出した。ここでは検出した遺構を中心に要約し、まとめたい。

1) 遺構について

まず住居跡についてであるが、住居跡は丘陵尾根上から 5 軒、丘陵西側下平坦面から 1 軒検出した。いずれも地山（花崗岩バイラン土）を半地下式に掘りくぼめた堅穴住居跡である。平面形式は、一部削平を受けたり楕円形に近いものがあるが、判明する住居跡すべて隅円方形である。また上屋構造のわかるものでは、第 2 a 住居跡、第 2 b 住居跡、第 3 a 住居跡、第 4 b 住居跡が 4 本柱構造、第 3 b 住居跡、第 6 号住居跡が 4 本柱構造、第 4 a 住居跡は 4 本もしくは 5 本柱構造であると考えられる。壁構は、第 1 号住居跡、第 2 号（a～c）住居跡、第 4 号住居跡、第 5 号住居跡、第 6 号住居跡で検出された。そのうち第 2 b 住居跡、第 6 号住居跡では壁沿いに巡っていることが確認できたが、その他では遺構の遺存状態から一部を確認するにとどまった。炉は、第 4 号（a, b）住居跡、第 6 号住居跡が浅く掘り込んだ地床炉であることに対して、第 2 号住居跡、第 3 号（a, b）住居跡については、床面に赤黒く焼けた痕跡をとどめるだけであった。なお第 2 号住居跡では 3 軒分、第 3 号住居跡、第 4 号住居跡ではそれぞれ 2 軒分の建替え・拡張が確認されている。このうち第 3 号住居跡は約 1.6 倍、第 4 号住居跡は 1.3 倍に拡張されている。

さて第 2, 3 号住居跡内床面には、貯蔵穴と考えられる土坑（以下「土杭」とする。）が掘り込まれている。平面形態は、第 2 a 住居跡に伴うと考えられる「土杭」は円形、第 3 a 住居跡に伴うと考えられる「土杭」は長方形（2 基）を呈している。このような住居内に「土杭」をもつ事例は、所有を明確にできる点で大変有意義である。しかしながら住居の内外に係わらず「土杭」はこれ以外に検出されていないので、他の住居跡の貯蔵形態については明確にできない。ところで住居内に「土杭」をもつ太田川流域左岸の旧高陽町内での事例は真亀 B 地点遺跡住居跡、大明地遺跡第 1 2 号住居跡、第 2 1 b 住居跡等があげられる。土杭の平面形態は円形と方形があり、4 基もつ例もあるが多くは 1～2 基である。これらの遺跡では屋外に「土杭」を伴う住居跡とともに「土杭」を住居内に外に伴わない住居跡も存在している。このうち本遺跡のように住居内に「土杭」をもつものもたないものの二者が存在する場合、第 2 号住居跡及び第 3 号住居跡とも建て替え・拡張段階において「土杭」を有していないことから時間的な問題で解決でき、屋内に「土杭」をもつ住居よりももたない住居の方が新しい。その場合「土杭」をもつ住居の床面積ともたない住居のそれでは、前者は「土杭」を有しながらも後者に比べて極端に狭いことがあげられ、後者への建て替えは単に生産力の増大に伴う居住空間の拡張化を示しているだけでなく、貯蔵形態の変化をも示していると考えられる。

その他の遺構としては、丘陵西側斜面を削って造り出した平坦面上から掘立柱建物跡が 2 棟、また第 3 号住居跡と第 4 号住居跡との間から土墳墓を検出している。掘立柱建物跡は柱穴の規模から高床式倉庫よりも平地式建物跡と推定されるが、野外炉などの生活痕跡を残していないことから単純に住居と判定することはできず、作業小屋や貯蔵施設等の非日常的な建物と想定する必要もあろう。土墳墓は単独で存在した。墓壇内から出土した遺物はなく、各住居跡との関係は不明である。本遺跡のような事例は大明地遺跡、浄安寺遺跡、小林 A 地点遺跡等でみられるが、一般的に集落と土墳墓が同一丘陵上で同時期に存在することは稀であることから、集落廃絶後に営まれたと考えられる。

最後に本遺跡の時期についてであるが、出土した土器から推定してみたい。各住居跡から出土した土器のうち器形の判明したものは少なく、また器種は甕形土器がほとんどであるため様相は判然としない。なお近年当地域の弥生時代後期～古墳時代前期にかけての土器編年が試みられているが、そのなかで大明地遺跡の調査報告の際行われた広島湾岸地域の土器編年によれば、第 3 b 住居跡出土の甕形土器（23）等は古墳時代前期第Ⅲ期様式の土器に類似し、また第 2 b 住居跡の甕形土器（10）等は弥生時代終末期～古墳時代前期第Ⅳ期様式の土器に類似していると考えられる。またその他の住居跡についても出土土器の口縁部の特徴からおおよそ前者の様式の土器に近似している。このことから本遺跡は少なくとも 2 様式に区分され、弥生時代終末～古墳時代前期にかけて営まれた集落であると推定することができる。集落構成

については、住居跡の配置から少なくとも3群に分けることができる。すなわちA群：第1号～第3号住居跡，B群：第4号・第5号住居跡，C群：第6号住居跡である。それぞれ1時期1軒ないし2軒の存在が想定され、建て替え等を考慮すれば3～4段階で1～3軒ないし最大5軒が建てられていたと考えられる。このような集落の構成・規模は、おおよそ既に調査が実施された広島湾岸地域、特に太田川下流域における集落遺跡の様相と掛け離れた内容ではない。ところで本集落は当然その規模から、ある拠点的な集落から派生した集落（分村）と考えられる。また出土土器から、移住（集落開始）から移動（廃絶）までは比較的短期間の集落であったと考えられる。拠点集落は、太田川下流域の様相からすれば、度々氾濫をおこす三篠川流域よりもその支流である小河原川流域の丘陵尾根上に存在する可能性が高いが、その所在や集落の変遷等の問題については本遺跡周辺において集落遺跡の調査事例がなく、今後の調査を期待したい。

2) 遺物について

ここでは鉄鏃をとりあげたい。本遺跡中3軒の住居跡から鉄鏃5点が出土しているが、そのうち第2b住居跡床面、第4b住居跡床面、第6号住居跡埋土中から出土した鉄鏃は、従来定角式と呼ばれている鏃型式に類似しているもので、共伴した土器から弥生時代終末～古墳時代初頭ないしは古墳時代前半の時期に所属する。従来定角式鉄鏃は、古墳を中心に出土し、かつ現段階で庄内型式土器併行段階以降出現するとされることから、いわば古墳時代の副葬用の儀器として一般的に見做されてきている。しかも住居跡から出土していないものであった。しかし近年集落跡からの出土例が増加しつつある。すなわち管見する限り、県内では本遺跡以外で広島市安佐北区落合岩上山田遺跡第1号住居跡、同安佐南区緑井毘沙門台東遺跡（包含層）また県外では山口県熊毛郡平生町松尾遺跡第1号住居跡（埋土中）、福岡市東区唐原遺跡第29号住居跡、熊本県阿蘇郡阿蘇町下山西遺跡第7号住居跡がある。前二者が図面を見る限りで両鎗造りである以外は、ほとんどが両丸造りである。また時期についても共伴した土器から古墳時代初頭を前後する時期に比定され、共通している。このように住居跡（埋土中を含む）から出土する定角式鉄鏃は両丸造りのものがほとんどであることに対して、古墳から出土する定角式鉄鏃は鎗造りがほとんどであることは注意される。少なくとも古墳時代初頭を前後する時期に鎗造りと両丸造りの2タイプの定角式鉄鏃が出現し、また各々出土する遺構を異にする傾向があるようである。ただ川西宏幸氏や松木武彦氏が論説したように定角式鉄鏃を古墳副葬用の儀器として、かつ中央政権からの配布品として意義付けるならば、集落遺跡から出土する場合とは性格上区別される必要がある。今後集落遺跡から出土する意味について意義も含めて考えていく必要がある。

以上みてきたように上深川北遺跡は、低丘陵上に立地する弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての集落遺跡である。恐らく三篠川よりもその支流である小河原川の形成した沖積地を農業生産の基盤としていたと考えられる。この遺跡の内容、規模等については、これまで旧高陽町周辺で発掘調査された集落遺跡と比較して逸脱する内容ではない。しかしながら広島湾岸地域のうち、三篠川流域での該期の集落遺跡の発掘調査の事例はいままでなく、貴重な資料を提供した。

注

1. 広島県教育委員会「恵下山遺跡群」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』，1977年。
2. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大明地遺跡」『山陽自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（Ⅳ）（財団法人広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第55集），1987年。
3. なお貯蔵形態の変化の推定は、太田川下流左岸地域において、貯蔵用土坑が古墳時代前期になってもわずかに残存するものの、ほとんど姿を消してしまうことから首肯できよう。
4. 注2に同じ。
5. 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「浄安寺遺跡」『山陽自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（Ⅲ）（財団法人広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第47集），1986年。
6. 広島市教育委員会「小林A地点遺跡」『広島市佐伯区五日市町所在小林A・B地点遺跡発掘調査報告』（広島市の文化財第46集），1990年。
7. 注2に同じ。

8. なお、広島市教育委員会では1988年相次いで提出した報告書のなかで、潮見浩氏が設定した上深川様式土器の三分類案を踏まえて、新たに上深川Ⅰ～Ⅲ式と呼称し、設定している。しかしこの各様式設定の内容が不明瞭であるため、今回は使用を見合わせた。
- a. 広島市教育委員会『広島市安佐北区落合南三丁目所在岩上山田遺跡発掘調査報告No.（広島市の文化財第40集）』、1988年。
- b. 広島市教育委員会『広島市佐伯区五日市町所在一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』（広島市の文化財第41集）』、1988年。
9. 大村 直「弥生時代における鉄鏃の変遷とその評価」『考古学研究』第30巻第3号、1984年。
- 大村 直「鉄鏃」『弥生文化の研究』第9巻 弥生人の世界、雄山閣出版、1987年。
10. 注8aに同じ。
11. 広島市教育委員会『広島市安佐南区緑井町所在毘沙門台東遺跡発掘調査報告』（広島市の文化財第48集）』、1990年。
12. 山口大学人文学部考古学研究室「松尾遺跡」『西部瀬戸内における弥生文化の研究』（山口大学人文学部考古学研究室研究報告第3集）』、1984年。
13. 福岡市教育委員会『唐原遺跡』Ⅱ（遺構編）（福岡市教育委員会調査報告書第207集）』、1989年。
14. 熊本県教育委員会『下山西遺跡』（熊本県文化財調査報告書第88集）』、1987年。
15. 川西宏幸「儀仗の矢鏃－古墳時代開始論として－」『考古学雑誌』第76巻第2号、1990年。
16. 松木武彦「前期古墳副葬鏃の成立と展開」『考古学研究』第37巻第4号、1991年。
17. それゆえに本報告書では、一応区別する意味で「定角式」鉄鏃と「」付きで呼称している。

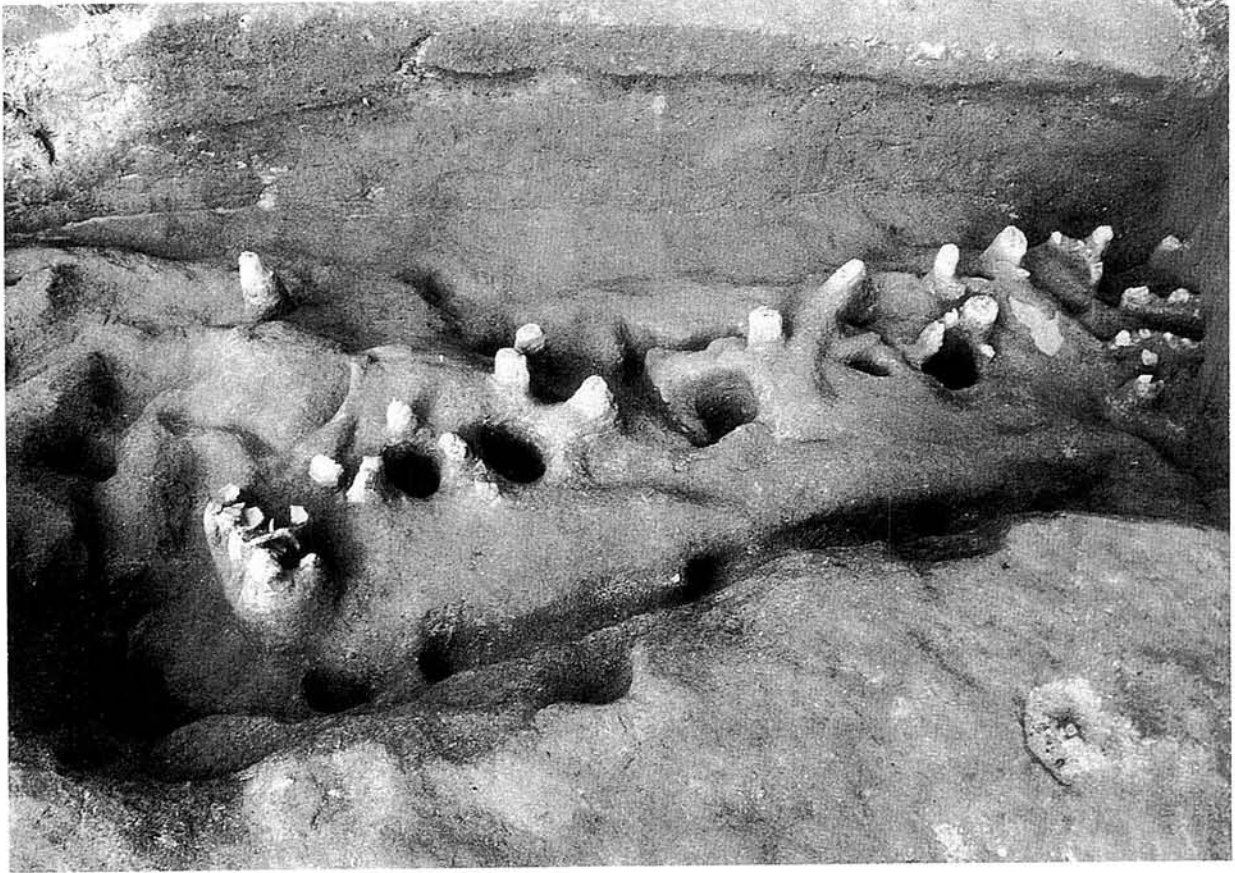
図 版



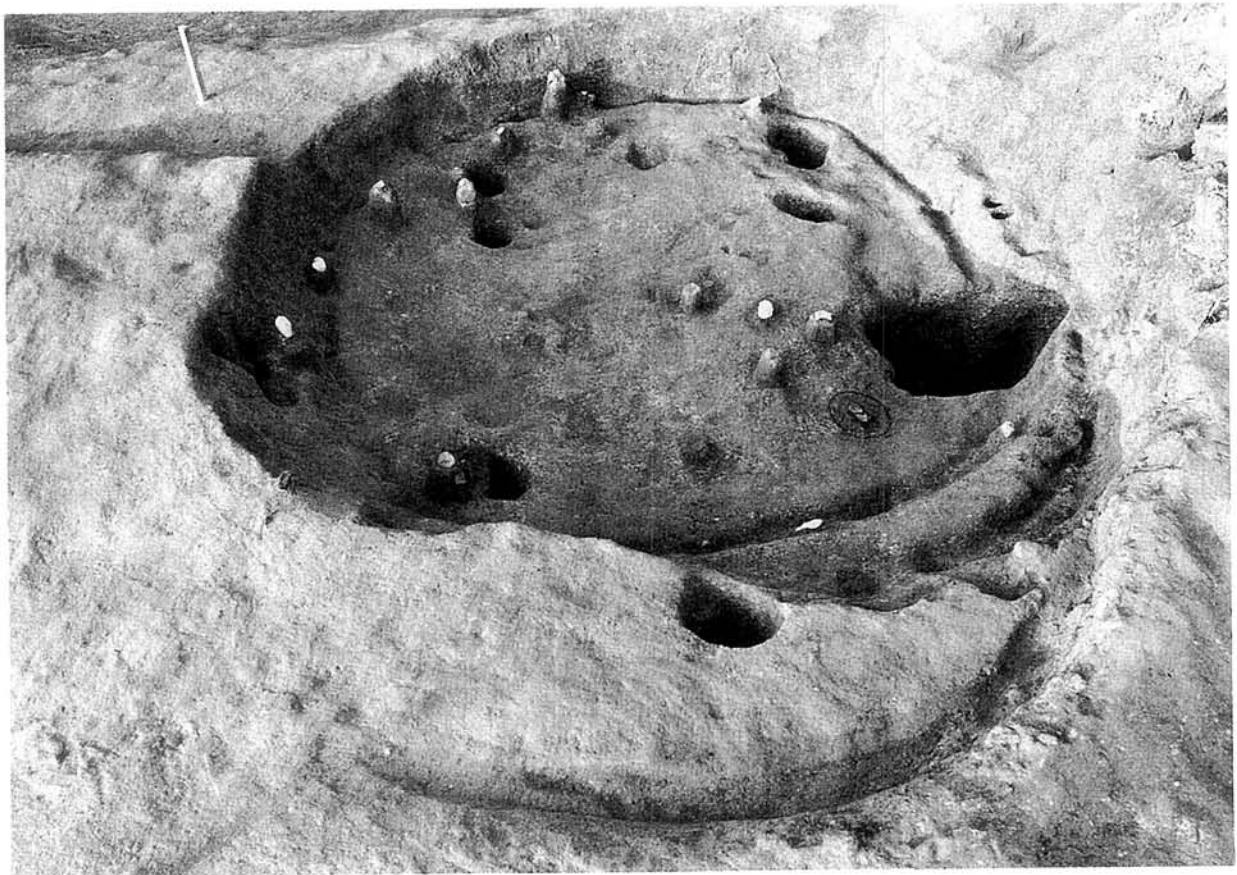
a. 上深川北遺跡遠景（西から）



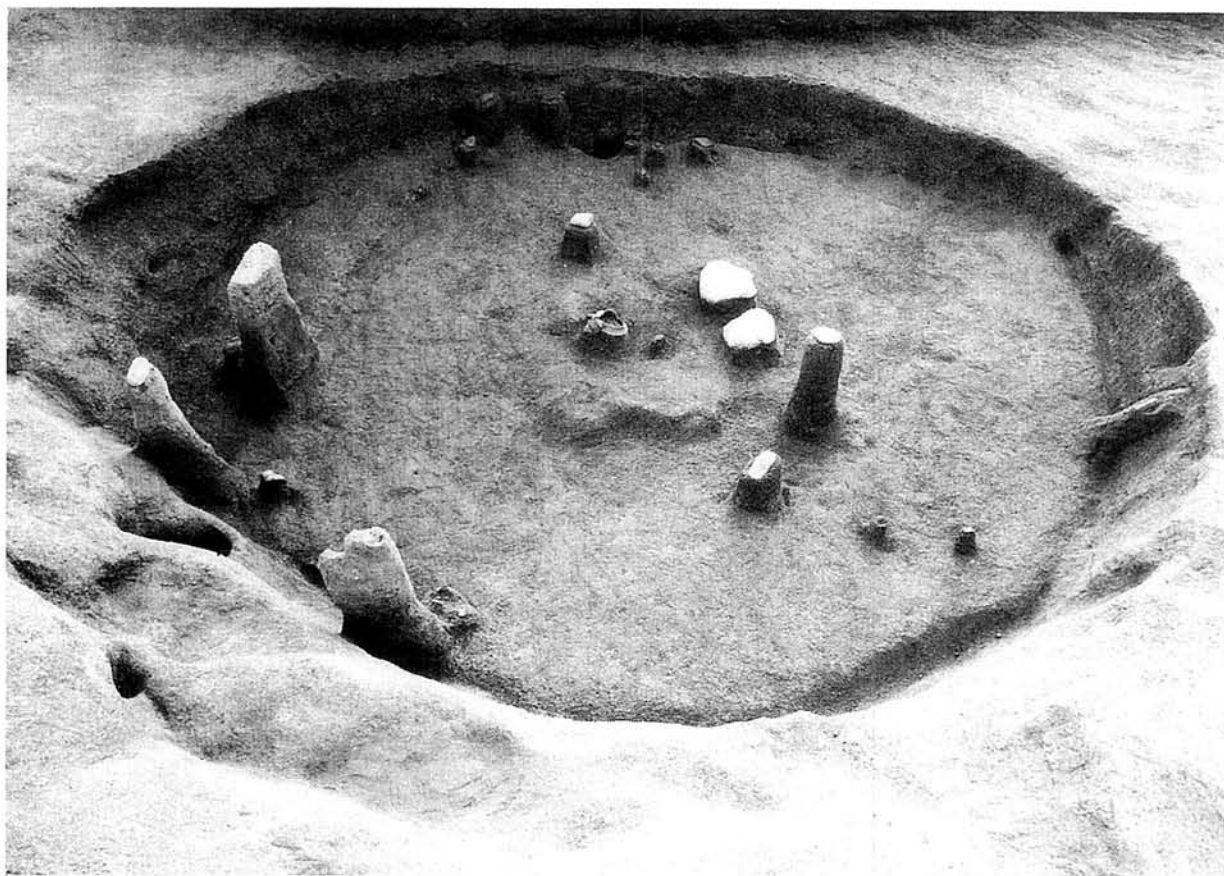
b. 遺跡全景（第1年次調査後；東から）



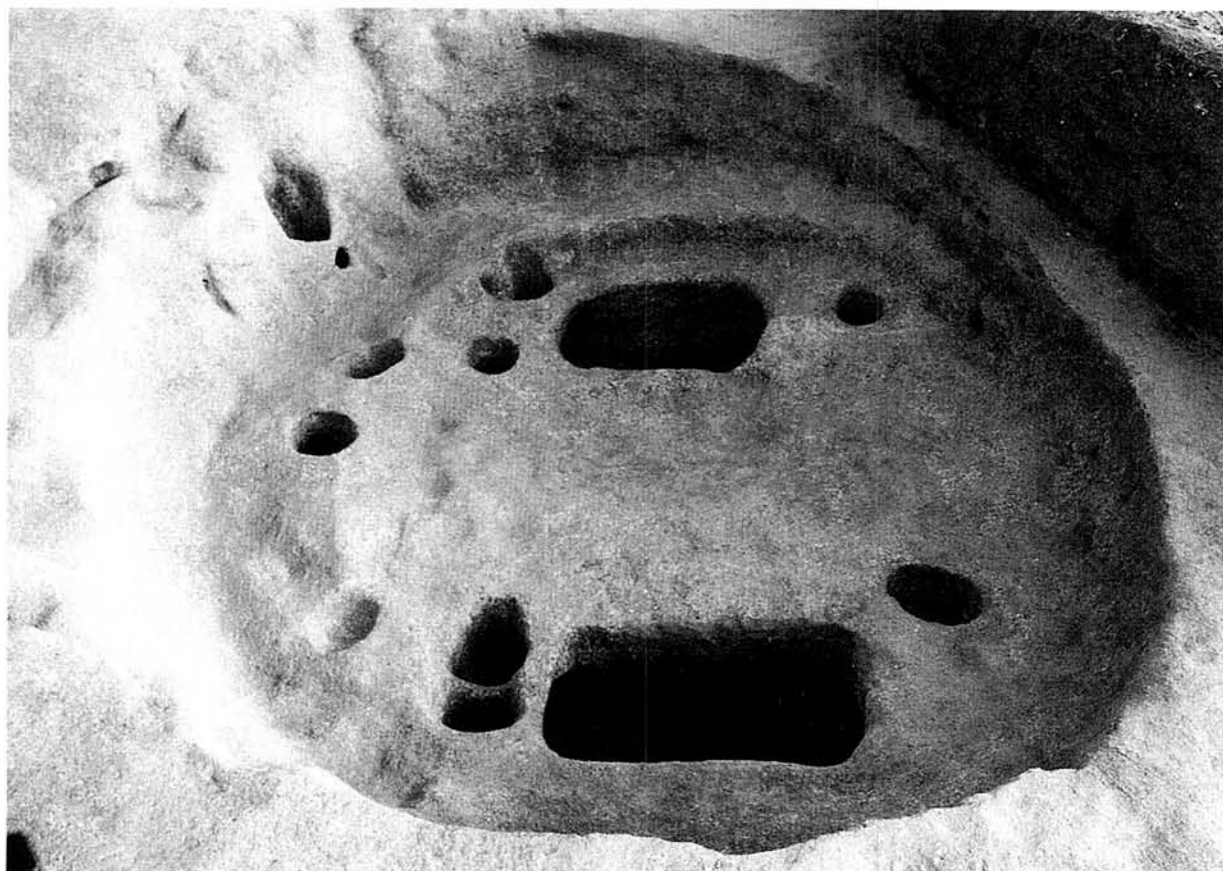
a. 第1号住居跡土器出土状況（南から）



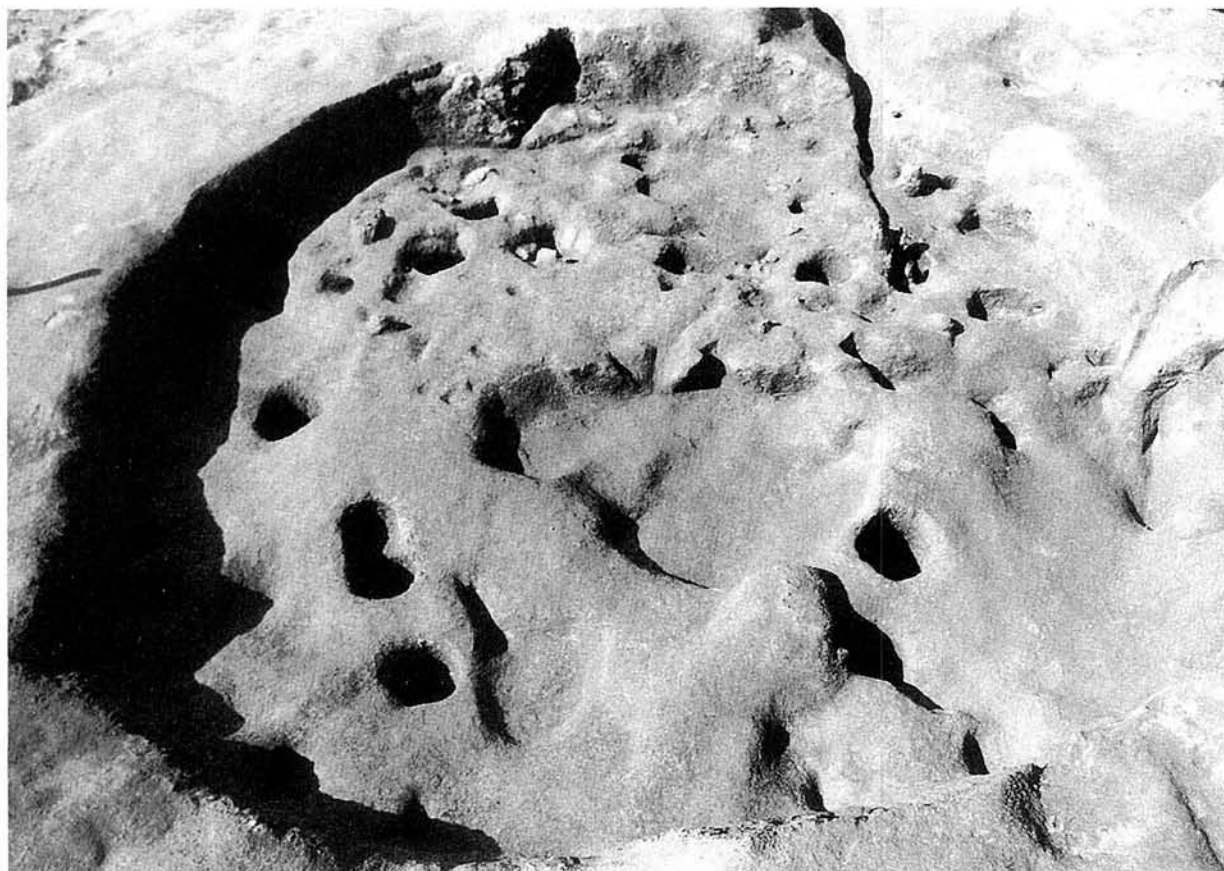
b. 第2号住居跡完掘状況（南西から）



a. 第3b住居跡床検出状況（北東から）



b. 第3号住居跡完掘状況（北西から）



a. 第4号住居跡完掘状況（南東から）



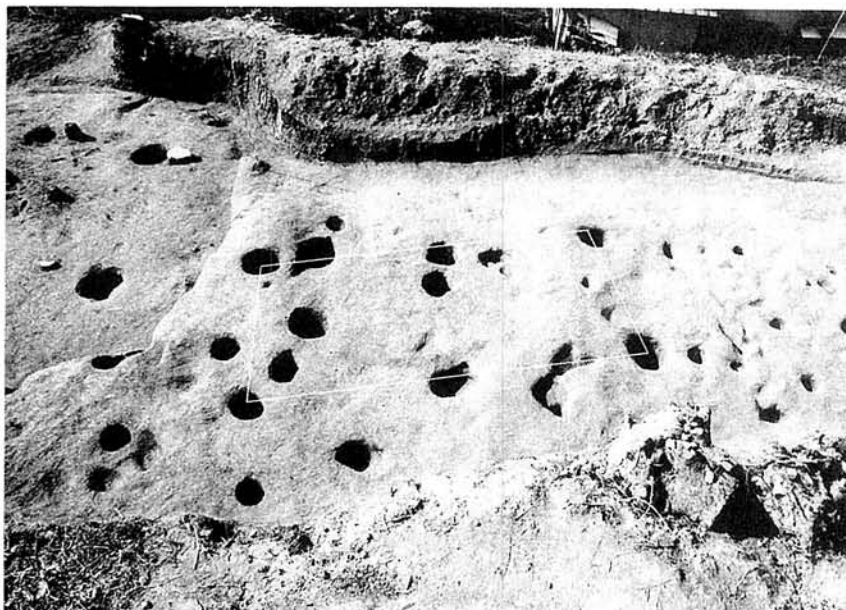
b. 第5号住居跡完掘状況（南西から）

a. 丘陵西斜面下平坦部
遺構検出状況（南から）

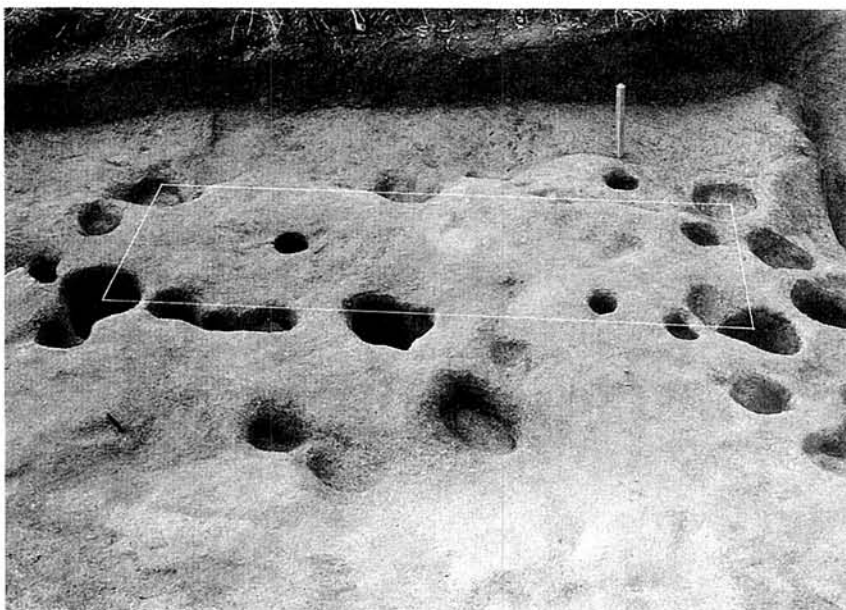


b. 第6号住居跡完掘状況（東から）

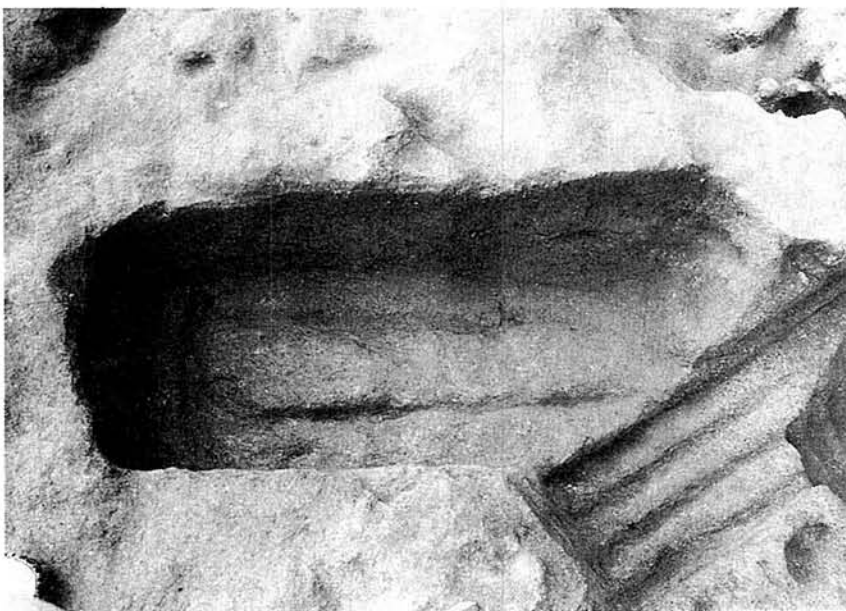
a. 第1号掘立柱建物跡完掘状況（東から）

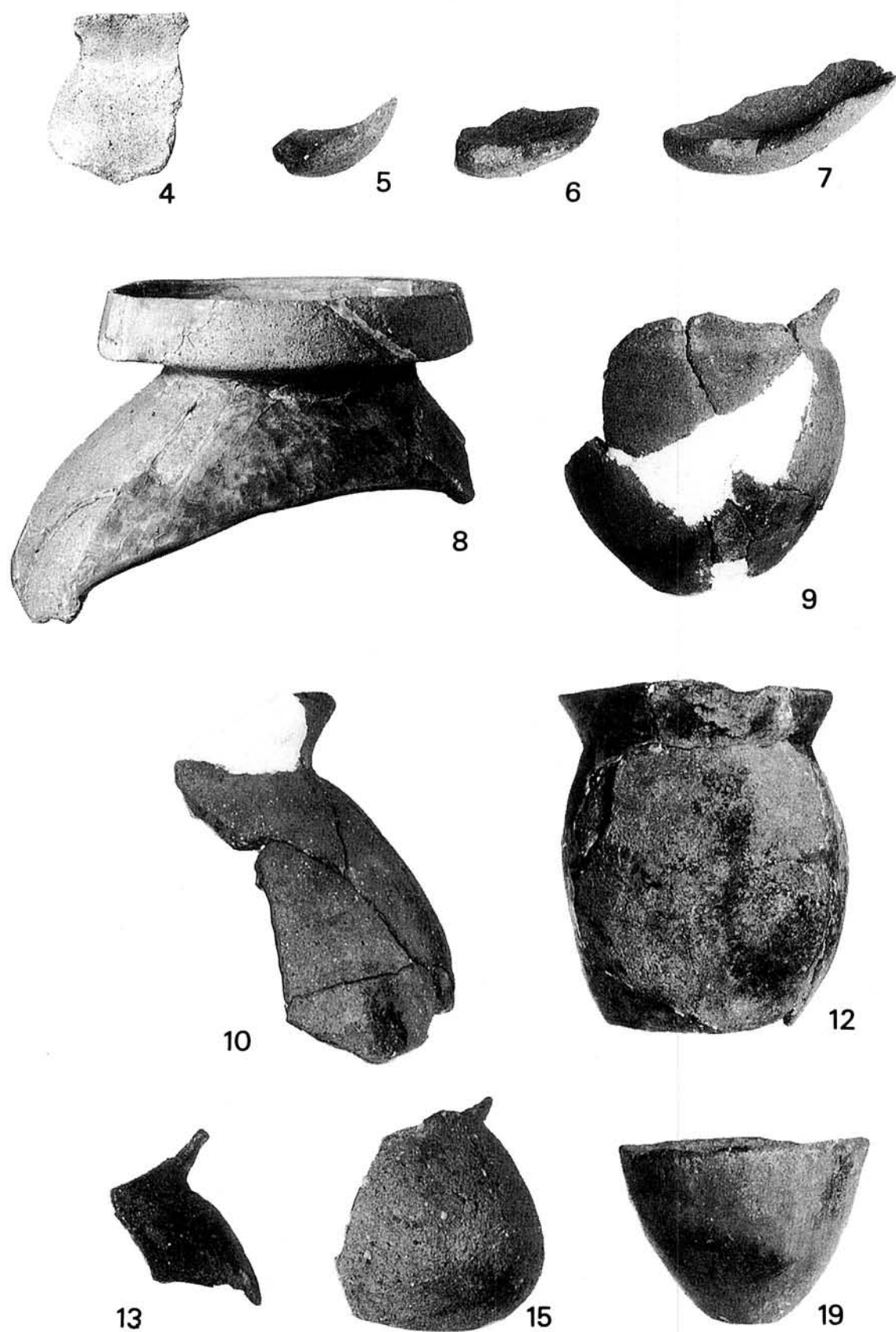


b. 第2号掘立柱建物跡完掘状況（東から）



c. 土壙墓完掘状況（南東から）





出土遺物 (I)



23



24



28



25



38



39



47



46



48



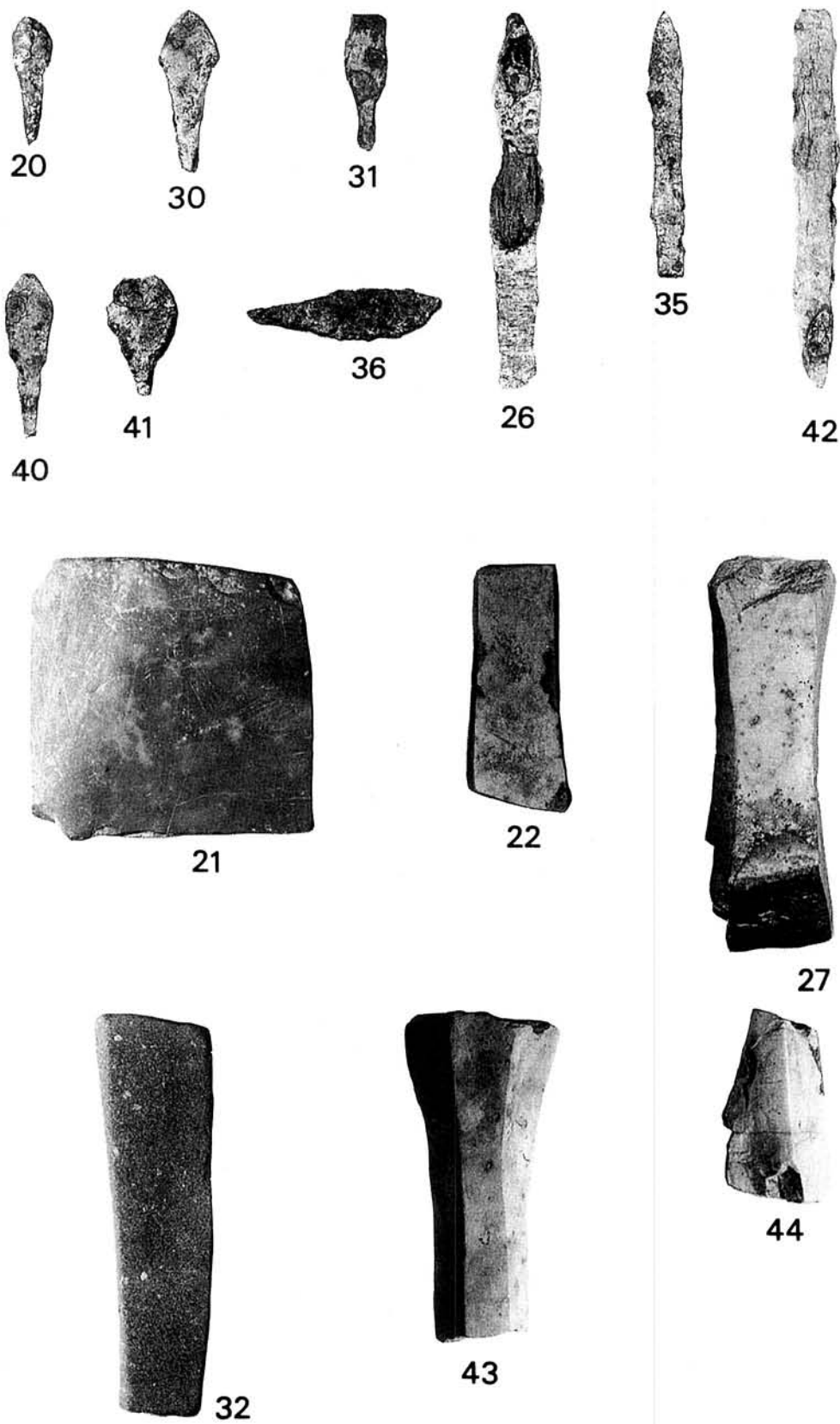
50



52



53



(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書 第3集

広島市安佐北区上深川町所在

上深川北遺跡発掘調査報告

1991年3月

編集 財団法人 広島市歴史科学教育事業団
発行

広島市中区国泰寺町一丁目4番15号

TEL (082) 248-0427

印刷 電子印刷株式会社

広島市中区堺町一丁目1番5号